

思い出の雑記帳*

北星学園大学 経済学部

増田辰良

2022年4月30日 NO. 18.

〒004-8631

札幌市厚別区大谷地西2丁目3番1号

北星学園大学 経済学部

メール・アドレス masuda@hokusei.ac.jp

* このワーキングペーパーは、著者個人の責任において書かれたものであり、北星学園大学は、発行管理のみを行っています。

思い出の雑記帳

目次

はじめに

思い出の雑記帳

はじめに

話し言葉というのは聞く相手が “聞きたいときに”、“聞きたいこと” を発しないと聞いてもらえない。どんなに立派な至言を口にしても相手が聞く耳を持たなければ伝わらない。

書き言葉にも同じことが言える。活字を読め読め、とどんなに真剣に薦めても相手にその気がなければ読んでももらえない。それでも書き手は読んで欲しくて内容のみならず、文体にこだわり続ける。

この文体に興味があつて、これまで色々な内容の文章を書いてきた。書くたびに文体の不思議な魅力に遭遇している。自分で書くぶんにはよいが、他人が書いたものを読むときも、内容よりも文体が気にかかる。なので、文体を見破って読み込むことの楽しさとは裏腹に読書そのものを楽しんでいない（作品に没頭していない）自分に気づくことがある。プロの作家は前者の読書体験を咀嚼し、自分の作品に応用するのであるが、素人ではどうていできない。ならば、自分の文体で “生きている言葉、生きる言葉” を書こう。

“他人の真似なんてしても、おもしろいやろ！”

思い出の雑記帳

1. 柿の実

小学生の頃の話です。私は悪ガキたちと行動を共にする悪戯っ子でした。秋になって、柿の実が熟れる頃でした。近所に、白壁の蔵のある廃屋になった庭にブドウの房のように実をつける柿の木がありました。悪ガキたちと木に登り、実をちぎってはぶつけ合って遊びました。

屋内にも侵入し、古箏の中にとくさんの古銭を見つけました。正しい記憶と正直な気持ちで書きますが、それを持ち出した記憶はありません。この廃屋（柴田さん？）には、今では住人がいます。（2012年8月25日、土曜日）

2. 雪割りと根明きの季節

これは雪国の3月半ばごろの話です。

「コンコンコンコン」

これが何の音か、分かりますか？ 狐の鳴き声ではありません。そんな簡単な答えであれば、訊ねません。何かをたたく音には違いありません。隣近所の玄関先の道路から聞こえてきますね。

これは鶴嘴つるはしといって固い土を掘るために使われる道具の音です。でも土を掘っているときの音で

はありません。土を掘っても、こんな金属音のような響きはでません。鶴嘴は土を掘るための道具であることしか知りませんでしたか？　そうですね。私も、この町に住むまでは、建設現場や農家でしか見たことがありませんでした。

これは凍った道路の氷をたたきながら割っている音です。そして正確にいうと、土を掘る鶴嘴ではなく、氷を割る専用の小さな鶴嘴の音です。これが雪の凍る北国にはあるのです。それでは、なぜ道路の凍った部分を割っているのでしょうか？　道路工事をするためにおこなう作業の一つではありません。

雪国では、これを「雪割り」と呼んでいます。早く氷が溶けてしまうよう、割った氷を陽当たりのよい路面へ移すのです。放っておけば、いつかは溶けて蒸発してしまいます。がしかし、春の陽射しを感じるこの季節になると待ちきれず、一刻も早く、春を体感したくて割るのです。それほど雪国に住む人たちにとって、冬は長く、春が待ち遠しいということです。

白い雪が溶け、真つ黒なアスファルトや畑の土が顔を出すと、「あゝあゝ」春が来たという安堵を感じます。みんなの顔が自然とほころんできます。あいさつも「やつと雪が溶けましたね。ようやく春ですね」となります。

もう一つ春を感じさせてくれるものがあります。3月もこの頃になると、木の根っこ周辺にだけまゝるく、まゝるく空間ができます。これは淡い春陽を吸収した木の温もりで樹皮に触れている雪が溶けたことによるものです。自然が作った造形美です。これを雪国では「雪根開き」「根明

ゆきねびら

(開^あ)き」と呼んでいます。冬中、枯れたように立ちすくんでいる木々も、これを見ると木の中には暖かい養分が流れ、木は力強く生きていることを思わずにはいられません。

おや、どんぐりの木の根明きの所に実でも落ちていたのでしょうか？　それとも雪が積もる前に隠しておいたのでしょうか？　リスが雪の上を駆けてきて、怯むことなく、この穴ぼこへ頭から潜りこんでいます。しばらくすると、ほっぺが破けそうなくらい大きくふくらませて、飛ぶようにどこかへ消えてしまいました。

この春は、鶴嘴のコンコンという音が何かを急かしているように聞こえます。また、きれいな根明きは、まるで希望や夢の世界の扉を啓いてくれているように見えます。

私の住む雪国では、春はこれらの季語とともにやってきます。明日、愛しいわが子が上京します。季節は待ってくれません。さあ「勇気をもって、恐れることなく、未知の世界へ飛び込もう！」各人各様の3月ですね。(2012年3月29日、木曜日)

3. 畦道

幼い頃、田圃の境界は畦道であった。この畦道には何ともいえない懐かしい思い出がある。田植えの季節ともなると、植える前に苗を水田に均等に投げ入れるのであるが、そのとき必ず畦道にいったん積んでいた。

昼食や休憩はこの畦道にお盆をおいてお茶やお菓子を食べた。

畦には色んな植物が生えていた。よもぎ、タンポポ、土筆、その他名も無い雑草などである。草刈をするとき鎌で指に傷をつけてしまったとき、その止血をするために、よもぎを石で潰して、その汁を傷口につけたものである。それで十分に効きめはあった。当然、よもぎ餅を作るときにも、よく摘んだものだ。名前は忘れたが、じゅづ(数珠)玉鉄砲の玉になる実をつける草もあった。

畦道の草刈は、その家人の性分を表現するものでもあった。雑草をしつかり刈り取っている家人は几帳面と見られたようである。また、この雑草刈りをする最中に、ヘビに噛まれた、ハメ（毒蛇のこと）に噛まれたなど年寄りから武勇伝を聞いたこともある。ハメに噛まれると、すぐに毒を吸い出すか、そうでなければ手首に近い所から切り落とした兵もいた。事実かどうかは定かでないが、「これがそのとき落とした箇所だ」と指を見せてくれる年寄りもいた。もちろん、そのまま死に至った人もいた。今は、この雑草刈りの手間を省くために、畦はコンクリートで作られている。

小学高学年の頃だったろうか、言いつけられていた牛小屋の仕事をしていない、ということので私たち男3兄弟は親父からこっぴどく叱られた。

「出て行け！ 家に入るな！ 飯を食うな！」

実家の右隣の畑の畦に段差があり、男兄弟はそこに身を潜め、薄暗い電灯の光がする牛小屋を眺めていた。親父はお袋を怒鳴りつけながら乳搾りをしていた。

その後、お袋に呼ばれ、家に入り、飯も食ったが、そのとき家の中で親父から何か小言を言われた記憶はない。それでも乳搾りが終わるまで3人で恐い思いをしながら身を寄せていた記憶だけは残っている。

それから畦道といえば、なぜか祖母が思い出される。これはなぜだろうか。働き者の祖母であった。

私は、いつの頃からか、夜寝る前に大学ノートに日誌のような文章を書く習慣が身についた。毎日というわけではないが、記している。そのノートの表紙には「畦道」という2文字がある。（2021年12月7日、日曜日）

4. つるし柿

この季節になると、思い出すことがある。子供の頃、田舎にはどの家にも甘柿と渋柿が数本植わっていた。今は吊るされている頃であろうか。わが家では納屋の屋根の南向きの日当たりのよいところに竹竿を通して、そこに「つるし柿」が吊るされていた。今はトタンで覆われて隠れているが白壁に㊦という屋号の付いている下である。納屋は祖父の代に建てたものなので、そして

祖父の名前は熊吉なので、屋号は熊だったかもしれない。私の記憶に違いがなければ、㊦である。

㊦や熊でないとしても確かに屋号の印はついていた。その謂われなどを生前の親父に聞いておけばよかったと思うが、もういない。

渋柿の皮を剥いて、吊るすのは祖母であった。子供の頃、このまだ完熟しない「つるし柿」を食べては祖母に叱られたものである。当時、鶏小屋の横に富有柿の木があり、この木を登って小屋の屋根から母屋の瓦屋根をつたわって、納屋の㊦の下まで辿り着くのである。子供だったので、梯子を直接納屋の屋根に架けるには力不足だったのだろう。盗み食いをするという悪知恵はあっても母屋と納屋の瓦屋根をつたい歩きするのは怖かった。最大限の悪知恵と勇気を振り絞ってこの盗みを実行していた。

育ち盛りの男の子である。完熟するまでに揉み揉みをし、白い粉が噴くまでは待つべきであるが、こんなにあるじゃないか、1個だけなら食べてもよからう、もう1個食べてもよからう、と

毎日食べるものだから、みるみるうちに柿はなくなってしまふ。揉み揉みをする祖母には、熟れるまで待つてから食べると美味しいのに！とよく叱られたものである。おやつのない時代のことである。腹を空かせた子供が待ちきれぬはずがなかった。

季節にはまだ少し早いが正月のしめ飾りにつける「干し柿」をみると、そんな働き者であった祖母の姿が、瞼の奥に浮かんでくる。冷たい風にあたり、揉み揉みをされ、陽の暖もりを受けて、吊るされている柿は祖母の味を醸しだしてくれていた。なお、私の定義では、「つるし柿」と「干し柿」とは別物です。(2012年11月11日、日曜日)

5. 大判焼き

私の右耳の鼓膜は破れている。この歳になるまで何度か耳鼻科に通院したことはあるが完治させないままきた。治療を受けても鼓膜は再生しないだろうと覚ったからである。また大きな弊害もなく毎年、人間ドッグで聴力検査を受けるが、左側よりもやや弱い程度で不便もしていない。

この破れであるが、これは子供の頃、か母(あ)やん(私の郷里では母のことをこう呼んでいた。父は父Ⅱとうやんである。)に耳垢をとつてもらっていたときに、突き破られたものである。決して、視力の強くないか母やんが電球の明かりで耳倉をさぐるので、大きな危険をとまなかったことだろう。私は平気の沙汰でか母やんの膝に身をゆだねていた。膝にあたっている顔の半面はか母やんの温もりを吸い取っていた。

その頃、この鼓膜を治すため国鉄鴨島駅の近くにある耳鼻科へ国鉄バスを使つて、週に何度か通院したことがある。最初は、か母やんが連れて行ってくれたのであろうが、その記憶はない。自宅から自分で北二条という四つ辻まで歩き、そこにあるバス停から吉野川に架かる中央橋を渡つて往復するのである。家も苦しかったであろうが、この往復のバス賃をもらつて通院した。いくらもらつたのかは忘れたが30〜40円だったろうか。何度か通院するうちに駅前に大判焼きを売る店を見つけた。1個50円だったかな。私は、もらつたバス賃の帰りの代金を節約して、つまり使わずに貯めて、この大判焼きを買つて食べることを思いついた。もちろん医院からの帰りは長い、長いを中央橋を歩いて渡った。どのみちバスは北二条から東西へ分かれて別の町へ行くので、北二条からは稲の刈り取られた田んぼの跡を左右に見ながら、わが家まで歩かなければならなかった。

結局、後々年、耳鼻科へ再々度通院したときも過去の治療跡がありますね、という医者言葉とともに子供の頃と同じような治療法が施されたように思う。

今は、ときどきWifeに耳をさぐつてもらうが、一言、「右のずっと奥の方はさぐらなくてもいいから」と伝える。か母やんの膝とは違つて、ソファアに横向きに寝て、耳をあずけるだけである。ときどき顔をゆがめると「痛かったあ！奥の方に溜まつているのが見えるけど止めとくわ」とWifeは手を止める。か母やんのつくつた古傷には触れないように。

秋風の吹く季節になると大判焼きの包まれた紙袋ごしに暖気が手に伝わってきた感触を思い出す。もちろん大判焼きを1個買うために何回分の帰りのバス賃を節約したのかは記憶にない。(2012年11月12日、月曜日)

6. 心の棘

小学生の頃の話です。登下校の途中に駄菓子屋を兼ねた豆腐屋(旧吉本屋の坂の下)がありました。下校時に、同じ学校へ通う別の悪ガキが、この店でこそ泥をした。自分は友達と遠目に眺

めていた。

ある日、巡査が家にやって来た。親父と話をして帰った（まったく別の用件だったようだ）。私は、ただ眺めていたこそ泥の件で巡査が来たのか、と気になってしようがありませんでした。今もその店は廃屋のまま現存します。帰省し、その店の前を通るたびに脳裏に浮かびます。いつまでも棘のように、心に刺さっている想い出です。（2012年8月25日、土曜日）

7. 大切な宝物

故郷を出てから、ずっと持ち歩いているものがあります。それは、お針箱です。男のくせいと思われてもしかたないですが、うんと若い頃に、シャツのボタンを付けるのに使いました。中は、40年間、変わりません。ぬい針、まち針、糸、はさみ、ボタンなどが入っています。

これに加えて、動かなくなつた腕時計も入っています。これは、私が高等学校へ入学したとき、いわば入学祝として、両親に買ってもらったものです。正しくは買ってもらったのではなく贈られたというべきでしょう。金に余裕ある両親ではなかったので、入学祝など期待していませんでした。さらさら望みもしていませんでした。

登下校は他にある時計をみて事前に行動すれば、時間は厳守できた。でも、多くの新入生たちは何がしかの祝いをもらったことでしょう。なぜなら義務教育を終えて、初めて試された入学試験に合格したのだから。そして、社会から認められた第一歩といえるかもしれないから。

親父とお袋からは事前に腕時計を買ってやろう？と声をかけられたことはあつた。でも、金を出してもらうのが、心苦しかった。「いらない」と答えた。ある日、自宅に帰ると、表の間にあつた勉強机の上に、リボンのかかつた箱が置いてあつた。えんどう豆を売って得た金で、買ってくれたものが、この腕時計です。わくわくしながらリボンをほどいた。高校へ合格したことよりも嬉しかった。大学院の後期博士課程くらいまで腕にしていた。が、壊れて、もう動きません。

でも、私の心の中では、ずっとずくと動き続けています。とても自分の手で、やすやすと処分できるものではありません。だって人生の中で、親から贈られた最初のプレゼントだったように想うからです。ほとんど手にすることもなく、蓋をあげないままのお針箱をみると、6月の太陽に咲くえんどう豆の白い花が目に見えます。

もう一つの宝物は親父の形見の財布です。これについては、他日、記しましょう。

付記。「表の間（おもてのま）」とは、田舎の部屋の呼び名です。4つの部屋があり、帳場、表の間、北の間、奥の間と呼んでいました。玄関に接しているのが帳場、食事をとるのが北の間（居間）、奥の間は夫婦の寝室、表の間は接待をする部屋です。姉はこの部屋で見合いをし、結納を交わしました。結婚式もこの部屋でした。仏壇もこの部屋にあります。お客さんはこの部屋に泊まります。私は、この表の間に勉強机をおいていました。（2012年8月31日、金曜日）

8. 獲れすぎた野菜

私は農家に生まれ、育った。今は、そうでもないようであるが、子供のころ、食卓には季節ごとに畑で獲れた新鮮な野菜が並んだ。並んだといえ、聞こえはいいが、これしかないのである。ないのだからトマト、キュウリの季節になれば、トマト、キュウリの料理、ジャガイモの季節となれば、ジャガイモの料理ばかりが、三度三度の食事に出てきたものだ。

当然、私たち兄弟は、「またトマトか！ ああああ！」と嘆きの連呼をしたものである。全ての

状況を理解しているはずの親父も、さすがに、また……か、と落胆した表情を見せていた。

さて、わが家の畑、先月あたりからインゲン豆が獲れ始め、そろそろ終獲時期が近づいてきた。獲れたものは一部を保存食用に冷凍庫に入れている。2日おきに収穫をする私に妻はうんざりした顔と声で、「もう冷凍庫には入り切らない」とこぼす。それにっられて、次男も一言「調理する人のことも考えて、収穫するように」といつちようまえの口をきく。

そんなとき、私は祖母から言われたように、「食べるものが余るほど獲れているのだから文句を言うな、世間には収穫したくても食べたくても、できない人たちがいるんだ」と小言を聞かせる。調理をしたお袋も「嫌だったら、食べなくてもいい」と開き直ったものだ。農家の主婦は働き手であるとともに、同時に料理人でもある。畑から帰って、すぐに食べられるものを作り、食卓へ並べなければならぬ。思えば、至難の業であつたろう。

今の私は、祖母とお袋のこの言葉に続けて、そして加えて「三度三度、自分が食べるから食卓に出してくれ」と懇願する。この「自分が食べるから」という言葉に農家育ちの自分の心根が表れている。妻や子供たちが侵入できない、理解できない領域である。

でも、こんな会話の後で、色んなことを考えてしまう。次男も、この家を出るが、その後、私が育てる野菜の量は減らさなければいけないのかな？ 収量の少ない苗物に代えなければならぬのかな？ いや畑の面積自体を縮小しなければならぬのかな？ 妄想は広がって、東京にいる長男には大学卒業後、札幌圏で職を得てもらって、私が育てた野菜の一部を食べてもらうかな？ 子供の頃と大きく違っているのは、獲れすぎた野菜を冷凍保存し、冬季に食せることであろう。

適量を知れ、と言われるけれども、こうした話題も飽食の時代ならではように思える。(2012年9月5日、水曜日)

9. 指の傷跡

私の左手小指の先から2番目の関節と薬指の第三関節には、他の部分とは肌色の違う所がある。そこは1・5センチメートルくらい白くなっている。11〜12歳頃に牧草を鎌で刈っていたときに付けた傷である。あの頃、学校から帰ると、毎日、長兄とともに軽トラック一杯分を刈ったものである。長兄に従い、畑の端から刈り後が四角になるよう刈った。左手で牧草をつかみ、右手に持った鎌で刈る。あまり器用でない私は何力所か傷を付けたが、いまだにこの傷跡が残っている。

肩にかける草刈機が普及してからは、長兄が刈って、私がホークでトラックの荷台に放り上げて乗せていた。それから、鎌を持つ機会も少なくなった。

生活の中で、もつともよく指をみるのは爪を切るときである。そのたびに、器用な長兄が鎌で、とてもリズムカルにザックザックと刈り進んでいた、あの「音」を思い出す。(2012年9月6日、木曜日)

10. トンボ

ピーマンの苗木を支える竹竿の頭でトンボが一服する季節となった。このトンボを見ると、よく思い出す童謡と光景がある。

♪夕焼け小焼けの赤トンボ、負われてみたのはいつの日か・・・♪

歌の中で背中に負っているのはお姉さんである。負われているのは幼い弟であろう。

私は自分が姉に負ぶってもらった記憶はないが、なぜかしら家の隣にあった桑畑の裸になった

桑の小枝に真つ赤な夕日が注いでいた光景が臉に浮かぶ。

姉に聞けば、きつと幼い私や兄を負ぶつてあやしたと言うことだろう。その姉もいまは旦那の看病中である。(2012年9月13日、木曜日)

1.1. これまでの私

私は中学生の頃から将来、現在の仕事に就くことをおぼろげながらに考えていた。そのため大学の経済学部を卒業するときには教員免許も取得した。がしかし、この免許を活用したことはない。いや一度、活用できる機会があったが、自分で壊してしまった。

学部の3年生のときにゼミで読んだテキストがきっかけで大学院へ進学し、研究者になりたいという思いが強くなった。当時のゼミ担当教員に尋ねたところ、神戸、山口、北海道に関連する研究者がいると教えてくれた。十分な勉強をしないまま受験しても合格する見込みなどない、と考へ、学部を卒業後、京都大学の経済学部へ聴講生として入学させてもらった。聴講生になるための面接をしてくれたのは後年、文化経済学会の会長をされた池上先生であった。自活していた私は留年などする考へは浮かばなかった。

それでも卒業してしまうと、また聴講生という肩身の狭さから将来への不安ばかりが心を支配していた。もちろんアルバイトもした。しないと食っていけない身分であったから。四条通りにあった飲食店(和食)で朝から昼過ぎまでの労働である。

交通費を稼ぐために自転車を利用したり、雨の日は徒歩で通った。この店では昼食も出たので、食費は十分にカバーできた。洗い場を担当したり、寿司飯を炊いたり、冷したりしたが、周りのパートさんはお年寄りが多く、休憩時間には赤ん坊の頭ほどの握り飯を作ってくれた。寿司ネタ

の端つこも「兄^{あに}やん、食べな」と言つてよくもらったものだ。店長は和服を着た女性であった。

他のパートさんよりも幾らか多めに時給をくれていた。今でも厨房にいた親方、見習いの方々の顔と名前が浮かぶ(長谷川さんとチサカさん)。数は多くはないが全国展開していた店なので、今も主要な都市で営業しているかもしれない。

店の仕事が終わると、京都大学の図書館へ毎日通い閉館まで勉強をした。閉館後、今出川通りをまっすぐに北野白梅町へ向つて帰った。聴講生になるために大学へは確か1科目1万2千円を払い、面接試験も受けた。この面接をしてくれたのは先に記した池上先生であった。科目は理論経済学のみを申請した。この担当教官が後に山口大学の先輩で大阪産業大学の教授をしている林田さんの指導教官になる。私はこの科目のみを申請し、その他のマクロ経済学、経済数学、財政学(面接をしてくれた教官)は各教官にお願いをして講義に出席させてもらった。周りは現役の京大生ばかりであった。

人間、どこかに所属しているということは心の強みでもある。今も持っている学生証には聴講生という赤の印判が押されているが、この1つの証明書で私は4科目の講義をタダで聴講させてもらったのである。今なら、こんなことは許されないだろう。

当時の京都大学の図書館について記しておこう。開館は朝9時だったと思う。開館を待っていると、入り口のドアから箒とバケツをもった掃除婦の小母さんが見えた。毎日のように掃除がされていたようだ。感心したことは、この9時の開館までに学生の行列ができていたことである。開館のチャイムとともに自分が慣れ親しんだ席をめがけて早足で向うのである。そう、この席がほぼ指定席のごとく決まっているのである。この秩序を知らない私が隣に座つたり、あろうことが指定席にでも座ろうものなら、白い眼で睨まれたものである。優秀な学生はこうして学習環境

を自ら確保する努力をしているのだな、と自分を反省させられた。こうした掟にもしばらくすると慣れた。

図書館では、寡占価格論を勉強した。学部のゼミのテキストを超える領域を勉強した。そんななか山口大学の研究者の著書、論文があった。山本先生、安部先生、小林先生である。当時、私はマークアップ率の決定要因に興味があった。この3人の研究者は共通の問題意識を持って論文を公刊されていた。なかでも山本先生、安部先生の寡占企業に関する実態調査はまさに私の問題意識を実証したものですぐに引き込まれた。

大学院への進学は山口大学に決めた。修士課程しか開設していなかったが、そんなことは気にならなかった。その年の9月だったと思うが、新幹線に乗って山口へ行った。湯田温泉の近辺の国道沿いにあるビジネスホテルに泊まった。筆記試験は経済成長論の問題であった。後に知ったが山本先生は学部時代にはハロッドくんと呼ばれるほどハロッドに傾倒していたようである。面接も受けたが十分な受け答えができた記憶はない。面接官に恵まれたといえようか。面接官は3人いたと思うが、うち1人は私の高校の先輩であった。浜田先生という。後日、知ったが、この浜田先生が入学を許可するようプッシュしてくれたようだ。当然、入学後は指導もするということがあったのだろう。確かに、入学後、山本先生の研究室へ指導教官として受け入れてくれるようお願いに伺ったときも「浜田先生のところへ行きなさい」と何度も忠告された。その度に私は、「いや、そうじゃなくて、私は本学に先生と安部先生がいるから来た」ということを伝えた。さらに先生は、1年目は浜田先生、2年目はご自分が面倒をみると言ってくれた。がしかし、山本先生でなければ、山口に来了意味がない、ということは何度も伝えた結果、結局、山本先生が指導教官になってくれた。

当時、先生は2人の院生を抱え、さらに学外でのお仕事が多忙を極めていた頃であったので、どの馬の骨とも分らない、私の面倒を引き受けるのは嫌であつたろうと思う。

山本ゼミでは先輩院生（林田さんと女性）とベインの『産業組織論』を熟読した。私は製品差別化市場におけるマークアップ率の決定問題をより深く勉強するために、不完全競争論へも手を広げた。チェンバリン、ロビンソンを読み、当時、中央大学の研究者を中心に流行っていたポストケインジアンPost Keynesianの寡占論も勉強した。こうした勉強を進める途上で研究者になりたいという思いが強くなった。その見込みのないことを見抜いた山本先生は私立高校の教員になることを薦め、紹介までしてくれたが、断ればよかったものをいい加減な気持ちで受けたため、先生や高校に迷惑をかけてしまうことになる。これが先に記した、教員免許を唯一活用しそなつた事件であった。山本先生からはこっぴどく叱られた。この叱られたことが今、教員をして学生を指導するスタイルにもなっている。いい加減な気持ちで取り組むな、真剣に取り組め、ということである。

山本先生にはどうしても博士課程へ進学し、研究者になりたいことを告げると、ご自分が指導したゼミ生は神戸大へ進学していると言われた。当時、神戸大にも寡占論の研究者がおり、受験すれば何とかなる可能性はあつた。また安部先生は一橋大学を薦めてくれた。この大学にも教える子が進学しているし、寡占論の専門家もあり、受け入れてくれる可能性は十分にあるという。ただし、自分にとって準備しなければならぬ受験科目があつた。第二外国語のドイツ語である。もちろん、大学院では経済史を受講しそのなかでドイツ語の独習もした。そして受験には辞書の持ち込みを許可されていた。しかし、十分な自信はなかった。お2人の先生が薦めてくれる研究者よりも、私には気になっていた先生がいた。それが北大の小林先生であつた。

当時、北大は第二外国語の受験を必修とはしていなかった。英語と修士論文に関する口頭試問だけであつた。この受験科目に惹かれたわけではなく、小林先生は3年間山口大学に在職され、その後母校の北大へ帰られたが、この3年間の山口時代にずいぶん多くの寡占論に関する論文を公

刊されていた。それを私はすべて読破していた。論文からは勉強時間の長さや広がりを感じていた。心ひそかに博士課程は北大Ⅱ小林先生のところへ行こうと決めていた。これを山本先生に告げたとき、いとも簡単に「小林さんであれば心配なく受け入れてくれる」とおっしゃった。「でも、わざわざ北海道まで行くこともなからう、就職のエリアは東北以北になって、本州へは帰って来れないかもしれないよ」と諭された。

それでも山本先生は、早速、安部先生に話をされ、小林先生にコンタクトをとってくれた。ところが、小林先生はアメリカへ留学中ということであった。さて、どうするか。修士課程をもう1年延ばして、来年、受験するか、このまま神戸大、一橋大のいずれかをめざすか。迷ったが、小林先生を待つことにした。1年分の授業料は免除対象にもならず、親父には迷惑をかけたかもしれない。しかし、結果として北大を選択したことは正しかった。

博士課程への編入試験は雪祭りシーズンだった。英語の試験は今のセンター入試と同じように数ページの冊子体になっていた。多くの大学院では1枚の試験用紙であったことから、まずこれに面食らってしまった。これは英語にうるさい白井先生が出題されたそうである。面接試験は修士論文への口頭試問であった。土曜日だったと思うが、面接試験時間帯には小林先生は講義が入っていた。面接官の1人であった小野先生が「小林先生の講義が終了するまで待っていてください」ということでクラーク会館の下にある喫茶店を紹介してくれた。

小林先生の面接は厳しかった。「英語の試験は何点くらい取れましたか」から始まりほとんどの時間を小林先生がしゃべっていた。小野先生はポジティブなコメントをくれた。終了後、私は、これで自分の挑戦も終わったと思った。もう北海道に来ることもないだろうと打ちひしがれて、大通りで開催されている雪祭りを観にいった。

その後、滝川市の江部乙に山本先生の叔母さんが住んでいるので、「ついでに尋ねてこい」と言われていたので、電車に乗って出かけた。山本先生からは、叔母さんは旦那さんと駆け落ちの状態で北海道へ来たと聞いていた。利発な叔母さんであった。叔母さんはもう1人の叔母さんと一緒に住んでいた。隣の家には娘さん（眞喜さん）が住んでいた。この叔母さんには私が最初に職を得た大学でバドミントン部の顧問をしていたとき、ずいぶんお世話になった。それは滝川市で開催された大会で勝つ予定はなかったが、勝ち残り、部員の持ち合わせがない、ということ、この叔母さんの家に泊めてもらったのである。叔母さんからは事前にお金を用意しておかないとダメという警告を受けた。結婚をして、子供たちが2、3歳の頃、妻も連れて、叔母さんを訪ねたことがあった。ずいぶん褒めてくれた。それから年賀状のやり取りはしているが、しばらく気にもとめていなかったころ、喪中の葉書を受けとった。次の年に、家族を連れてお墓参りをした。それから私も公私に渡り忙しくなり、今は眞喜さんと年賀状のやり取りをするだけになっている。もう1人の叔母さんも6年前くらいに亡くなったという葉書をもらった。

さて北海道から山口へ帰って山本先生に試験の結果を知らせた。にこにこ笑いながら「小林さんはいい先生だから、いい先生だから」を連発するのみであった。合格発表は1週間後であった。私は県立図書館の近くに間借りしていたので、もう何もすることなく、図書館にある新聞各紙の求人欄を丹念に物色する時間を過ごしていた。合格しなければ、働くつもりだったので、新聞の求人欄のみが頼りだった。ところが合格発表日の次の日に速達で合格通知が届いた。北海道から山口まで郵便は2日かかったようだ。早速、山本先生に連絡をした。このときも先生は、「小林さんはいい先生だから」としか言わなかった。

修士論文の審査はその後におこなわれた。審査委員であった安部先生によると、小林先生からはうんと早い段階で私の面倒をみるという手紙が届いていたとのことであった。そんなことから山本先生はにこにこ笑っていたのかもしれない。

後日、先輩の林田先生から聞いた話によると、安部・山本・小林の共訳になっているシロス・ラビーニ『寡占と技術進歩』は小林先生が担当する部分を山本先生が邦訳されたそうで、山本先生はこのとき小林先生の無言の恩を売ったのかもしれない。

山本先生が亡くなられたときゼミOBで追悼集を出したが、そのとき小林先生にも原稿を依頼し、書いていただいた。そこには、「山本さんは自分が重荷を背負って他人をたてる、そして決して自分の手柄にはしない」という文面がある。先輩はこのことを言っていたのだろうと思う。何はともあれ、受け入れられて私は札幌へ来た。

大学で紹介された間借りの家を探してまだ路肩に雪が残る創成川を渡ると、数名の女子校生と出くわした。そのときの会話に……べえ、というのを聞いた瞬間、やはり自分は遠くへ来たのだなあ、と実感した。

小林ゼミには意外と多くの院生がいた。先生はお心が広くて、ご自分の専門以外の院生も頼まれば名前だけでも貸すということを受け入れているとのことであった。同学年の院生は2人であった。先輩は3人いた。大学院での講義は全てゼミナール形式だったので、本心からシンドかった。小林先生からは、特に、理論や数学を中心に勉強しなさいと言われていたので、履修をしたが、これで研究生活を続けていくのかと思えば、気が滅入った。自分は、就職は本州の大学を希望していたので、論文を3本作成したかったが、「急ぐことはない、じっくり勉強しなさい」と忠告された。小林先生はご自分が院生のときには受けることもできなかった科目の担当者がいるので、それをしっかり勉強しろ、ということであった。今では、この忠告をもっと素直に聞いてその方面で努力をしておけばよかったのに……と思うこともある。そんな教官の中で小野先生は別格であった。ケンプの『国際経済学』を読んだが、数式をみると、最初に答えが出てくるのである。「この答えはこうなるはずだ」と黒板に答えを書いてから数式を解き始めるのである。こんな賢い人がこの世にいるのか、と感心させられるばかりであった。アメリカで教育を受けるとこんなふうに問題を解く習慣を身に付けるということは後日教えられた。

小林先生とは専門の論文を読んだ記憶がない。学部ゼミにも出なさいということで同僚院生と出席していた。ここでも驚いたが、読むのは洋書である。それも中級レベルである。そして詳しい内容は理解していなくてもゼミ生たちはほぼ確実に正しい訳をするのである。後年、先生は学部ゼミ生にも過分なテキストを読ませた感があるとおっしゃっていたが、北大あたりに入学する学生の能力は高いと思った。

博士1年目は修士時代の勉強を発展させて、差別型寡占産業の価格戦略を勉強し論文としてまとめた。しかし、理論的背景が弱いこと、記述統計でしかない、ということから十分な評価を得るものではなかった。

小林先生からは法学部で産業組織論と関連する経済法（独占禁止法）の研究会が毎月開催されているので出席するよう言われた。この研究会への出席の成果が後に博士論文としてまとめる論文へとつながっていく。当時、研究会を主催していたのは実方先生であった。この領域の大家である今村先生もご健在で毎回出席されていた。私は後に公正取引協会という役所が出している横田賞を受賞するが、そのときの審査委員にこの2人の先生方が入っていた。賞状と30万円の小切手をもたらった。これを受け取りに東京へも出かけた。結婚した直後だったと思うが、お祝いを皆でした。賞状は額縁に入れたが本箱の片隅に横たわっている。賞状を見ては次の仕事がないということと投げやつである。捨てたわけではない。この受賞論文を中心にとまとめたものが処女作『独占禁止法の経済分析』である。処女作にこだわるのであれば、この邦語よりも1年前に科研費の出版助成金をもたらって英語版を刊行している。

こうした研究成果が出る前の就職活動はやはり大変であった。名もない短期大学へ書類を送つ

でもそのまま封筒を変えて送り返されたこともある。そのたびに自棄酒を飲んで解消していた。北海学園大へは2回、就職できる機会があったが実現できなかった。北海へ行っていれば、もう少し違った研究生活が過ごせたかなと思う。人事はいろんな兼ね合いで難しい。横槍を入れられることもある。この世界にいれば味方もときとして敵になることすらある。今の勤務先である北星大への移動ももう5、10年早ければ、また違った生活になっていたことと思うが、こればかりはうまくいかない。これ以外に幾つか移動できる可能性もあったが、戸建ての家を構えると、また家族が増えると制約されるばかりであった。

北大の経済学部で何とか助手を1年半ほどやらせてもらってから、最初に就職したのは江別市内に新設された大学である。15年ほど居たのだが。おそまつとしか言えない組織であった。ここでは、新設された最初の新入学生に必修の経済学を講義したが、これが欠席なし、私語なし、の静まりかえった教室に感動した。新設大学の第1回目の講義ができたというあの感動は以後味わうことはなかった。

自分の業績が増えるたびに、いつまでも留まることが苦痛になってきた。36歳のときに、北海道大学から博士（経済学）の学位を取得した。当時、英文の論文を毎年、*Hokudai Economic Journal* に投稿していたので、その努力を小林先生が認めてくれたのだ。博士論文としてまとめたさいという助言をもらったのである。そして、数回、科学研究費をもらっていたので、出版助成金をもらって英文図書（*Antimonopoly Policy of Japan*）を刊行した。翌年には、その日本語版『独占禁止法の経済分析』も刊行した。まさに北大の *Journal* 様様であった。

その後、新たな研究領域として文化経済学に興味が湧き、数本の論文を紀要に刊行した。これを佐々木晃彦先生（元九州共立大学）に送ったところ、先生が監修者となった文化経済学シリーズの第4巻に『観光の文化経済学』という書籍を出版する機会を作っていただいた。

研究成果が出ると、自ずと欲も出て、大学を移動したいという思いが強くなってきた。当時、妻に多くの愚痴を聞かせたものである。妻も「嫌なら移動すれば」と言ってくれていた。そんな思いを断ち切るべく、海外研修として6カ月間ウオーリック大学へ出かけることにした。家族を連れて、私にとっては初めての渡航であった。

ウオーリック大学ではワーキングペーパーを1本残してきた。また、今の仕事につながる起業論の研究を始めるきっかけともなった。それを形にしたものが *Small Business Economics* に掲載された論文である。査読付きの海外ジャーナルということで、この1本の刊行によって、その後、多くの副次的な良い効果を受けている。

その後、15年勤めた最初の職場から現在の職場へと移動した。その前に本州の国立大学への移動の可能性もあったし、札幌市内の大学への移動話もあった。できれば後者へ移動できれば最も良かったのであるが、人事だけは何があるか分からない。結局、うまくいかなかった。北星大では2002年に開設されて経済法学科という学科に所属した。この大学へは数年前に経済政策論の非常勤をしたこともあった。移動の声を掛けてくれたのは小林ゼミの後輩であった。北星大の組織運営は前任校と大きく違っていた。まずクリスチャン系の大学であること。ただし、これはまったく言動を制約するものではない。確かに、ルールは多くあるが、それに縛られて動くということもない。しかし担当科目数が増え、ノルマは週5コマである。これを上回る分は手当てが支給されるので、苦痛にもならない。金が欲しければ、3コマ余分にすれば100万円近い手当てが支給されるからである。

研究面では、大学名だけで得をすることがあった。それだけ大学に品格があるということであろう。52歳のときに、海外研修で1年間、ニュージーランドのクライストチャーチにあるカンタベリー大学に滞在した。この滞在期間中に *Leo-Paul Dana* という若い研究者に遭遇したことが、

さらに研究を促進してくれた。彼がエディターを勤める国際ジャーナルに多くの論文を掲載してもらったのである。論文の内容はすべて日本の起業活動に関するものであった。北星大は研究費が基準額から業績に応じて上乘せしてもらえるシステムなので毎年、このポイント数が大きく、上乘せ金額を高額になった。それもあって、また講義のコマ数が多かったこともあり、外部資金を獲得するということは止めた。もらっても使いきれないのであった。

北星大ではワーキングペーパーの制度も作ってもらった。こちらにも10数本の論文を刊行している。後年、それを短くまとめて紀要にも掲載してきた。

また、東京大学社会科学研究所が収集した二次資料を分析する研究会にも1年間、出席させてもらい、起業に関する論文をまとめることもできた。いま、Google Schore^①とTatsuyoshi Masudaと入力すると、海外の研究者に使われている私の論文が検索できる。日本語も含め、60数本の活字があるが、そのうち10本は誰かの論文で先行研究として、取り上げられている。Small Business Economics に掲載された論文が一番使われている。やはりレフェリー制度のしっかりしたジャーナルへの掲載が信用を高めるようである。

入学してくる学生の基礎学力が下がってきて、専門を教えるのもつらくなってきた2013年には、一次関数のみを使って、ミクロ経済学のテキストを刊行した。テキストさえ発行しにくい時代である、印税なしの出版社から千部、発行してもらった。とくに、1年生にはこのテキストを読み上げながら、重要な部分を追加して説明する講義をしている。この講義スタイルでちょうどいいようだ。

これでもって書棚には単著が4冊並んでいる。退職までにもう1冊、刊行したいと考えている。こちらは原稿もそろっている。まだ統一した記述にする作業が残っているが。

還暦（2015年12月6日）を迎える5年くらい前から、退職後のことを考え、趣味の創作も始めた。幾つか文学賞に投稿してみたが、まだ顕著な成果は出ていない。でも専門の勉強と違い、文章を作成すること自体、とても楽しい。

子供たちが東京の大学へ進学し、もう少しで子育ても終ることから、自分のために投資をしように考えたのも、還暦を迎えるころであった。まず、歯を治療した。次に、自分の原稿を活字にしたくて、同人誌にも入会した。最初の投稿原稿がこの6月には活字となって現れる。同人誌には家族や自分を対象とする私小説風の創作文を掲載したい。また、自分で命名したショート・チャットという短文も掲載したい。それから、朝日新聞の声欄にある「かたえくぼ」という投稿欄に私のショート・チャット風の活字が掲載されたことも記しておこう（2015年3月10日）。こちらは理人（長男）が高校2年生のときに採用され、2千円の図書カードをもらったことがあったので、私もそれを狙ったが、採用されても図書カードはもらえなかった。悔しい思いをしたのは、同じく朝日新聞の土曜日版にある「いわせてもらおう」への原稿が最終的にボツにされたことである。こちらはフイクションであったが、選者によれば、事実を紹介するコーナーらしく、採用されなかった。

創作意欲は短文のみでなく、俳句や川柳にまで及んでいる。『公募ガイド』という雑誌があつて、俳句や川柳を公募し、採用されると高額の賞金をもらえるものが幾つかあった。こちらも賞金狙いで5・7・5と指を折りながら作句している。

このように読む本や興味が文芸物に変化してきたので、専門の図書は数年前に一度古本屋へ売却した。10箱1万円であった。この書斎の書棚は文芸物で占められている。経済書は若い頃、懸命に読んだ思い出深い書籍とテキスト類があるのみである。

書棚の書籍をこのように文芸物に変えられたのは、大学の賜物である。北星大では、図書館のスペースを確保するために大学が支給する研究費で買った書籍類はすべて消耗品として処理され

ることになった。そして個人の所有物として処分をしてもいいことになった。私はこの恩恵を最大限に活かして、文芸物を買いくつっている。ただし、それへの恩返しとして在職中に何か顕著な成果を出したいとも考え、孤軍奮中である。(未完) (2013年1月20日、日曜日)

12. これは暴露話です？

「増田さんは30数年間も大学で研究と教育に携わってきたそうですね」

「そう、36年間ですね。院生時代を含めると44年になりますね」

「長いと色んな学生や同僚の方に接してこられたことでしょ。大学の教員は個性派が揃っているようですが、何か笑えるような面白い話をご披露していただけませんか」

「そうねえ、色々と居たし、あつたよ。思い出すままに話しましょう。休学を延長したいという学生がいて、休学願いの面接をした翌日に復学願いを事務へ提出した学生がいましたね。どちらかを選ばせるのに時間をとられましたよ」

「アル中で講義がなおざりになり、学生から大学当局へ訴えられた若い教員がいたね。最大限の温情で当局が病氣療養に専念させるため休職を勧めたようです。しかし、当の本人は逆ギレして、それなら辞めてやるというて依願退職をしましたよ。どうしちゃたんでしょうかね」

「講義中に中座してトイレへ行つたのだが、ピンマイクをONにしたままジャージャー音を教室に響かせた教員もいたね。無線や電波はどこまで飛んでいるか分からないね。目に見えませんか。要注意ですよ」

「ゼミの開始10分前になるとよく無言電話がかかってきたこともあつたね。あの年は超過して講義のコマ数が増え、手当ても増額された年でした。ちゃんとゼミ室へ行つて仕事をしているか否か、きつと誰かが確認していたのでしょうね。こちらは18年間も勤めて唯一休講にしたのは母親の葬儀の日のみ、という真面目ぶりだったですがね。それまで休講手続きさえ理解していませんでしたから」

「それから学科の長を任されたこともありました。これがお手当て以上の激務でしたね。とにかく会議が多すぎましたね。出席していることで、なにか職務を果たしているような雰囲気でしたね。こう言えば、私がいかに事務処理に長けていないか、好きでないかを暴露していることにもなりますね。そうそう、この職務に就いていたとき、私が事務処理の連絡や調整のために事務室へ行くと、衝立の陰で話のやりとりをPCに入力するキーボードを打つ音が聴こえてましたね。きつと事務局からは信用されていなかったのでしょうか。後日、トラブルがあると責任を回避するために、増田が何月何日にこうしやべっていた、という記録を残していたのでしょうか。なにも、トラブルなど生じませんでしたけどね。事務の若手も嫌な仕事をさせられているのだな、と同情しましたよ」

「論文を出さない、いや作れない教員もいましたね。20年近くも活字がないのですよ。もう大変です。昇格人事をおこせません。大学の昇格人事は教歴と論文数で決まるのですが、教歴はあつても論文がない、それも1本でいいのですよ。でも、これが作れないのですよ。ある会議でおっさんやおばはんが教えているわけじゃないのだから、論文くらい書け！というお叱りを私が受けましたね。本人たちに伝えます、としか逆襲できませんでした。情けない思いをしましたね。大学を知らない方からすれば、信じられないことだと思いますが、事実です」

「私の担当ではありませんが、1年生の科目で4月の開講時には100名以上の学生が教室にいたのに、2カ月後にはこれが0になってしまう科目もありました。これがほぼ毎年の現象だったのですが、不思議でしてね。学生曰く、内容がとんでもなく専門的すぎたようです。当の教員は

理解できない学生が馬鹿だ！とかたづけていたようです。教育は相手があるので、その評価は難しいですね」

「毎年、ゼミナールの募集をかけても応募者が0という教員もいました。およそ百数十名の学生がいるにもかかわらず誰1人からも選ばれないのですよ。応募者の少ないゼミを選ぶことのメリットを学生に説得したときもありましたね。もつとも50数名の学生が特定のゼミを希望するというのが、教員側に問題があると指摘しましたがね。学生も教員も色々です」

「勤めている大学の体質が嫌いで他大学へ移動したいというのが口癖だった教員が定年まで勤め上げたこともありました。やたらと引越しをする教員もありましたね。年賀状をもらうたびに住所が変更していました」

「離婚問題が裁判で長期化して、その間、夢遊病者のような生活をしていた教員もいました。精神労働者は仕事以外で悩むと泥沼に陥るのを目の当たりにしました。幸い、私はそんな沼に入ることありませんでした。妻に感謝すべきですかね」

「大学院時代も面白かったですよ。研究室の洗面台で髪をカットし、頭を洗う先輩、そればかりか下着を洗って窓辺にロープを張って干していたという院生もありましたね。当時の院生たちは金なくて何とか生活費を捻出する工夫をしていたんですよ」

「美術館でムンクの絵の前でナンパした院生が逃げられなくなって結婚したというケースもありました」

「長く教えてきて分かったことは、講義に出席しない学生に、なぜ出席しないのか、勉強しない学生になぜ勉強しないのか、と問いかけることくらい愚問はないということです。やる気もない人には何を言っても愚問なんですよね」

36年間も同じ空気の中にいると、大学のおかれている状況や学問への注文なんかありませんか。

「大学全体への注文ですか。そうですね、現実しか見ない職場から幻想、抽象的なことに専念できる職場へ戻って欲しいですね。大学は本来後者の立場にあるべきだと思います。実用的ですぐに役に立つことを求めるのではなく、人間の魂の基底の底にあるものを探し求める場でありたいですね。知識のみを伝授するのが大学ではない。カスミを喰って生きているような人間が居てもいいし、そうした個性を持つ人間を大切に作る空間であって欲しい、と思いますよ」(未完)(2013年1月31日、木曜日)

13. 赤点

私には姉が1人、男兄弟が2人います。私は4人兄弟の末っ子です。この姉兄弟は中学まで同一の学校卒ですが、高校からはすべて違う人生を歩むこととなります。姉は商業高校、長男は農業高校、次男は商業高校、私は普通科高校へそれぞれ進学しました。そして、この4つの高校とも異なる町に立地していました。

誰も特別優秀な成績ではなく、どんぐりの背比べ程度であつた、と思います。互いに意識などしたことはありません。そんな中で私よりも2歳上の次男はなかなかの興味深い人生を過ごしてきた、と私は思っています。本人に言えば、「この馬鹿が」と怒鳴られるかもしれませんが。男3兄弟の共通点は中学時代にクラブ活動で軟式野球をやっていたことです。姉もソフトボールをやっていたので、兄弟はみんな球技に関するスポーツをしていたことになります。このうち、次男は高校生になっても硬式野球を続けていました。部員の少ない高校であつたのかどうかは知りませんが、兄貴はセンターを守り、リリーフピッチャーでかつキャプテンまで務めていました。こ

う書くと立派に聞こえますが、学生時代に親父から激怒された数はこの兄貴がダントツであつたろう、と記憶しています。

ある日、私が高校から帰宅すると、この兄貴が家にいました。これは珍しいことでした。定期試験期間中でもなく、

「今日は部活が休みなのか」

と訊くと、

「1週間の停学だあ」

と、元気に返されました。

理解できなかったので、

「テイガクって、なんだあ」

と、私は訊き返しました。

どうやら野球部の部室でタバコを吸っているところを先生に見つかったようです。

そんな兄貴に親父は、

「光源寺（わが家の菩提寺）にでも預けて性根を入れ替えさせるか」

と、怒り心頭に達していました。

私は大学への進学を考えていたのでそれなりに机に向う時間は長かったのですが、この兄貴は遅い帰宅後、夕飯を食って、風呂に入って、布団にもぐって、起きて、朝飯を食って、登校して、を繰り返す毎日でした。ほとんど机に向う姿を見たことがありません。その机は私の占有物でした。

そんなあるとき、珍しく兄貴が教科書を片手にぶつぶつと何かを暗記していました。

どうしたのかと訊くと、

「赤点をとったので、再試験を受けるんだ」

という答えが返ってきました。

これまた十分に理解をしていない私は、

「アカテンって、なんだ」

と、訊き返しました。

兄貴はあきれたような顔をして、

「お前、赤点、知らんの？」

と、逆に叱り付けるように言い返されました。

この評価制度は今もあるようですが、そして高校によつて基準も違うようですが、どうも兄貴は幾つかの科目で基準点を大幅に下回る素点しかとれなかったようです。もちろん、私が通う高校にもこの制度はあったのでしようが、私や友人は該当者になつたことがないので、知る由もありませんでした。

兄貴は学期のテストごとに、ものの見事にこの基準に引つ掛つたようです。その季節になるとぶつぶつと暗記をしている姿を幾度もみました。

そんな兄貴も当時、東海地方に本社のあった大手の都市銀行へ就職をしました。この就職試験が秋頃にあつたと記憶しています。

「松下幸之助氏は一代で家業の電気店を……世界の松下電器株式会社にまで成長させ……、私は……御社において……なりたいたいと思います」

兄貴は試験日が近づくにつれて面接試験の準備をしていたのでしよう。こうしたことを反復練習していました。そして大阪にある支店へ列車―フェリー―列車を乗り継いで行きました。自分1人で田舎から出ていく兄貴が偉人に見えました。一生懸命、反復練習をした成果が実つたので

しよう、停学処分も赤点も何も無かったごとく、採用試験にパスをしました。そんな兄貴がまた偉人に思え、家を出て行くときは寂しかったです。

それから日本経済の荒波にもまれ、銀行業界は合併と改編の連続のなか、高卒の学歴しかない兄貴は銀行勤務から関連会社への転職を何度か繰り返し、ついに決められた定年まで勤めあげました。リストラ、首切り、転職があたり前の時代を乗り越えてきたのです。確かに、私の兄弟の中で最も骨太である兄貴は2人の子供を育て、5人の孫にも恵まれました。そして今は年金が支給されるまでの数年間をスーパーの駐車場係りとしてアルバイトに励み汗を流しています。

中学高校時代には家の百姓をほとんど満足に手伝ったことがなく野球ばかりに打ち込んでいた兄貴も今は自宅の近くに家庭菜園を借りてせつせと野菜作りに精をだしていると聞きます。この点だけは、血は争えませんが、私も畑仕事に興味の一つになっているのだから。

こんな兄貴を見ると、学業成績では人の丈は測れないとつくづく思います。赤点をとりうが、停学をくらおうが、性根がしっかりしていれば、人間は真つ当に生きられるものだ。私のように、もつと勉強をして、もつと本を読んでなんて失敗の先にあることばかりを考えて生きていくよりも、はるかに達観した立派な人物に見えてくる。人間、力強く、しぶとく生きることだと教示されているようです。ちつと持ち上げすぎかなあ、兄貴！（2013年2月10日、日曜日）

14. ボールペン

机の前のマグカップに挿された筆記具の中には使われることなく、命を落としたボールペンが幾本かある。先端のインクが固まって、使用価値がなくなってしまったのである。命を落として使いものにならない代物なんて捨ててしまえばいいだろう、と思われるが、未練があつて挿されたままになっている。

旅行先のホテルの部屋でメモ書きとして利用し、そのままバックとともに帰ってきたものたちである。幾つかあるものを回し使いすれば、特定のものだけが命を落とすこともなかったでしょう。ペンの胴にはホテルのネーム、アドレス等が印字されており、手に取ると利用したときの光景が臉に浮かぶ。最新の新参者は6年前のものです。

これはニュージーランドの南島の端にある街で歴史的建造物ともいわれるホテルにあつたものである。目の前に鉄道の駅があつた。

「Where are you from?」

と訊いてくるので、

「I came from Japan.」

と、応えたらピザ屋のおねえさんにひどく感動された街である。

観光のオフシーズンだったので外国人を見るのが珍しかったのであろう。街には、和食を出す店もあるのでそのシーズンになるとはるばる日本からも観光客が来るのであろう。

旅の目的は先住民の民具を模った博物館とそこに飼われている古代生物を観賞することであつた。

移動は飛行機を利用した。市内から徒歩で往復できる位置に飛行場はあつた。季節は冬で霜柱を踏みながら、帰りの飛行機に乗るために歩いた。もつとも歩けるといっても、歩いているのは私だけであつたが。

日本の地方空港よりもはるかに狭い敷地であつた。帰りの飛行機は1時間以上も到着が遅れた。待合室には地元の乗客がたくさんいたが、慌てることもなく、怒ることもなく平然と雑談しながら機体の到着を待っていた。遅延のアナウンスもない。これが日常のようだ。同じ島国に住む私

とは違った時間軸で生きているのであろう。どうしても先のことを悲観的に予想してしまう自分を反省した。

顔面しわくちやだらけのお年寄りが、

「どこからきたのか。休日を楽しんでいるか。自分は孫が北島へ帰るので、寂しいよ」と、ごくフレンドリーに声をかけてくる。

そんなこんなあれこれを機上でメモするときに使ったのがこのボールペンであった。これから将来2度と訪れることのない街、ホテルを想うと写真以上の愛着があつて、命は尽きても手放せないのである。(2013年2月25日、月曜日)

15. カレーライス

カレーライスにまつわる話題を纏めたアンソロジーを読んだ。そして弁当を食べた後、この文章を書いている。今日は職場へ出ないと決めていた。それを女房に伝えていなかったのも、作ってくれた弁当はリビングで食べた。胃が膨れた状態でカレーライスを頭に浮かべながら文章を書くのは、昼間と夜間に書く文章のリズムに違いがあるように違和感を覚える。私の場合、夜間に文章を書くとき情緒的になりがちである。

カレーライスと書いたが、ライスカレーという言い方もあつて、どちらが正しいのかカレー(ライス)とライス(カレー)のいずれに主体を置くのか、もはつきりしていないようだ。私はしゃべるとき自然とカレーを頭にもつてくるので、ここでもカレーと略そう。

どの著者の文章からもカレーと言えば、幼いときの郷愁が連想されるようである。そして今も昔も子供たちはカレーが大好きである。なぜだろう? 母親が作ってくれたカレー、お手伝いさんが作ってくれたカレー、意気込んで父親が作ってくれたカレーなどなど。私も母親が作ってくれたカレーを想い出すが、これは今でいうところのスープカレーに近いものであった。毎回、「こうではないだろう」と不平を言うと、母親はただ一言、「黙って、食べな」と語気を強めやり返してきた。

次に想い出すのは大学生のころ、生協の食堂で食べたカレーである。当時、具材は入っていなかった。いや、入ってはいたのであろうがカレーを大量に作り、毎日、煮込むので具材は溶け込んでしまったのだらう。ときどき肉のような微細な具材を見つけては、今日は入っているなどと感じたものである。生協で食べるもののなかで、このカレーが一番うまかった。それもそのはずである。煮込む日数が長きにわたるのだから。

独身時代に自分で作ったカレーは1回限りでは食べつくせず、一度作ると3〜4回は食べた。料理に不調法な者にとつては効率的な料理である。当初、製作したカレーはやはり母親が作ってくれたものに似ていた。少し贅沢な思いをしたくて、卵を1個割り込むと卵白の化学反応で汁があのだろドロに変身することは自分で試して知った。このカレーを始めて異性にごちそうしたのが、わが女房である。彼女はその味よりも具材にシイタケが入ったことにひどく驚いたようで、後々までシイタケの入ったカレーなんて始めての体験だった、と言っていた。もちろん、私はいかなる具材であれ、下味などつけない。ジャガイモ、ニンジン、タマネギ、肉さえもぶつ切りにして鍋に投入するのである。何か加えようとすれば、オタフクソースかな。ほぼ純天然素材のカレー、これが私流である。

生まれ育った田舎では皿に盛られたカレーに醤油やカレー専用の少しドロットしたカレーソースをかけて食べていた。これは関西方面での食べ方であらう。この地に来てからは他人がそんな食べ方をしているところなど見たことがない。この話をする女房は目玉をギョロとさせて驚い

ていた。

私の調理法であれば、手っ取り早く胃におさめることができる。食事を楽しむというよりも生きるために食べていることを、かつて友人は、こう表現していた。

「増ヤンの食事は生物的だなあ」

うまいともまずいとも評価しない食べ方なのである。これも私個人の問題ではなく、育った環境によると自分では納得している。裕福でもない百姓の息子が食べ物にいちいち評価など下すひまはないのであった。胃におさまればそれで十分であった。

こんな私流のカレー作りが活躍してくれたのはクライストチャーチにあるカンタベリー大学で約1年間、単身で生活をしたときであった。街中にある日本食スーパーで、日本で購入する値段よりも2〜3倍はしてたであろうルーを買ってきては毎回、1食限りの分量を作った。というのもハウスをシェアしていたので、1台の冷蔵庫内の空間もそれぞれシェアしており、作り置きできなかつたのである。あのカレーの匂いが同居人の食料品に滲み付くことを避けていたのである。昼食として作っていると帰宅した同居人がランチは、

「Are you cooking something curried food?」

と、声をかけられたものである。

このハウスでは鍋に一食分の米、鳥肉、ニンジン、タマネギなどを入れ、さらのルーを2かけただけ入れて、飯ごう炊飯をする要領で作った。もはやカレーではない。イカ、エビなどの海鮮が入ればスペイン料理のパエリアと呼ばれるものになる。

現地にもカレー屋は幾つかあった。大学のキャンパス内には、まさにインド人が経営するカレー屋があった。ここには足繁く通った。中国人であろう手の空いた料理人が英会話の勉強を兼ねてウインドウ内にあるカレーを注文すると、よそおってくれるのである。下手くそな英語で注文する私に彼も下手くそな英語で答えるという何とも奇妙な光景であった。ここで食べたカレーはルーとライスが別個の器に入っていた。よくは知らないが、これが本格的なカレーライスというものなのだろう、と思っていた。私はいつも5ドル程度のあまり辛いものを食べていた。ブツクシヨップの隣にあったあのカレー屋、まだ営業しているかなあ。

キャンパスの端にある道路を越えたところにもレストランがあった。こちらは5ドルや7ドルではすまない、12ドルは払っていた。帰国するまでに2回利用したことがある。現地に長く住んでいる日本人に誘われたときと、日本からのビジターと利用したときである。彼女らとは日本で再会するときには東京のどこかカレー屋で落ち合いましょうね、と実現しそうな口約束をしたままである。

カレーは誰にでも簡単に作れて胃を十分に満たしてくれるものの一つであり、ありがたい想い出が多い。想い出といえば、シェアハウスを出て帰国する際、持ち出すはずのゆで卵を2個、冷蔵庫に残したままだった。帰国後、わが家の冷蔵庫を見るたびに、あのゆで卵はどうなったろうか、としばしば回想することがあった。(2013年8月28日、水曜日)

16. アルコール

アルコールといえば、話題にこと欠かない。列記してみよう。

あれは院生時代のことである。昼食時に同僚がビールでも飲もうか?と声をかけてきた。数秒の沈黙の後、「飲もう」と同意した。この沈黙は奨学金で生計を立てている身の上をしばし考える時間であった。でも饒舌になった自分は世間が忙しくしている中でいい身分だ、と優越感を覚えていた。まだ、学者として食っていけるどうか未知数な時代であった。

酔えない酒もあった。親父の葬式の日、田舎の慣例として手伝ってくれた隣近所の住人に食事や酒を振舞うのであるが、遺族は先にねぎらいの食事を用意された。この酒やビール、いくら飲んでも飲んでも覚めている。酔えないのである。不可思議な思いで呑んだアルコールの味はお袋を送るときも同じであった。酔えなかった。

職にありつけない身の上を憐れに思い、自棄酒も飲んだ、飲んだ。飲んで、失敗や不運を忘れようとした。忘れたように忘れられない脳裏にこびりついた不運もあった。でも、この一杯と決めて飲み、不運に区切りをつけてきたこともある。酒の力を借りて最終決断を下したことも多々ある。

結婚したての頃、外で飲んでぐでんぐでんになって帰ってきてても女房はリビングで灯りをつけて待っていてくれた。そして、ぐでんぐでんの私の我儘、「水をくれ！」を聞いてくれた。今はぐでんぐでんに酔って帰ってくることもなくなった。帰りが遅くなった夜、リビングは真っ暗闇である。隣の寝室から女房の高たかい躰がゴ〜ゴ〜と響き渡るのみである。時間の流れたことを想う瞬間である。(2013年8月29日、木曜日、通勤バスの中で書く。)

17. 草取りとコオロギ

例年になく体に堪える酷暑の夏が過ぎ、この季節、草むらでは虫の音が騒がしい。秋の初めを告げるメロディである。

その奏者であろう1匹のコオロギに前庭にある菜園の隅で遭遇した。ちよつと触手を震わせて、小首を傾げ、すぐさま露草の根元へ潜り込んだ。それを抜こうと掴んだ手を止めさせられた。(2010年9月15日)

18. パフリカ

畑のパフリカが真っ赤になった。

こうなるまでに、とてもグロテスクな経過を辿った。

当初はピーマン色の緑である。

その後、緑と赤を混ぜた何とも形容し難い黒ずんだグロテスクな色合いになる。

これを過ぎると、しだいに赤みを増し、ついに真っ赤になる。

太陽の当たる部分から色づく。

ここからグロテスクである。

6月に実をつけて、3カ月以上の観察を経ての、収穫である。

初物の味はどんなかな……。 (2010年9月17日)

19. 畑の収穫

ようやく、つるありインゲン豆の収穫ができるようになった。

取り残しがないよう目を皿のようにして頭を棚の中へ突っ込み、上下左右、手前、こちらから向こう側へと手を伸ばしてもぐ。

でも葉っぱの裏には、運良く発見されない大きな豆が残ってしまう。

野菜に付きものは小虫である。

小虫を見つけると、愛おしさも湧いてくるが、やはり指でピーンとはじき飛ばしてしまう。潰すのはあまりにも可哀そうでしょう。

野菜に虫が付くのは、その実が美味しいことの証です。

虫たちは美味しい実を見分ける本能をもっている。

虫の付かない野菜などけつして美味しいわけがない、と思う。

でも、これまで遭遇しなかった小虫が野菜にも付くようになった。

これも温暖化の影響なのかな。(2011年8月4日)

20. 真つ赤なツツジ

庭のドウダンツツジの葉っぱが真つ赤になった。

秋とはいえ、暖かい霧雨の降る土曜日である。

2本のツツジのうち1本はこの家を建てるときに造園家から購入し、もう1本は隣人からいただいたものである。

雪囲いをしてやる季節となった。

例年、この真つ赤な葉っぱを擦り落^{こす}しながら作業をしている。

今年は、もう少しこの真つ赤を楽しめそうな気温の推移である。(2011年11月5日)

21. ヒヨドリのいたずら

季節はヒヨドリたちの繁殖期であろう。

巣をつくるために小さな木切れや枯れた草を嘴にはさんでいるのを見かける。

この野鳥、わが家の菜園にも来ている。

つるありインゲン豆の棚である竹棒を結んでいる麻ひもを盛んに嘴で引っばっては切り、どこかへ運んでいるようだ。

確かに窓から目撃した。

しっかりと結び直しても、また飛来して、解いてしまっている。なんとも野鳥の知恵には感心させられる。

そんなヒヨドリの行動を電線の上からカラスが観察しているのも滑稽である。(2012年7月8日)

22. 新種のとんとう虫

畑仕事をしていると、3年前くらいからか、子どもの頃から見てきた丸みをおびた七星に替わって、体が少し長めで赤色の鮮明なとんとう虫が目につくようになった。

今頃が繁殖期なのであろう、畑の端にある草むらで交尾をしているのに出くわす。得体の知れないものなので、見つけては臆することなく潰している。

温暖化の影響か、外来種か、いずれにしろ、環境が変化してきたことを体感させられている。(2012年7月14日)

23. 虎柄服のミツバチ

菜園の端のラベンダーが小さな群青色の花をつける季節となった。

そこへ虎柄模様の服で丸みのある体軀（お尻は白）をしたミツバチが飛来しては花粉をついばんでいる。
とらから

このミツバチ、春先に訪れる輩（全身虎柄服）に似ている。数匹が飛来しているので、どこかに巣があるのだろう。

ミツバチが食する花粉の違いによって、蜜の味も異なるという。

わが菜園に飛来する虎柄服バチの造った蜜はいかななものかな……。 （2012年7月14日）

〔付記。この虎柄模様は外来種のセイヨウオオマルハナバチであろう。大雪山系の化雲岳と赤岳の近くで3匹、捕獲されたようだ。在来種のエゾオオマルハナバチ（きつと丸みのある全身虎柄服）の生息区域を侵害するほど、繁殖しているようである。退治すべきか、否か。『朝日新聞』朝刊、2012年8月31日〕

最高気温が20度を切る季節となった。群がるラベンダーの間から幹を伸ばし、咲いている花に小さな3種類目のミツバチがやってきて、花粉をついばんでいる。この種類は、本州で幼い頃から見知っているものである。前記の2種類のミツバチも、この花に留まっていた。季節ごとに、違ったミツバチに花粉を提供している、この花、昨年までは、雑草だと思い、根元から切っていたのだが、今年はどこまで生長するのか見届けるために切らなかつた。私はこんな可憐な花を咲かせるこの花の名称を知らない。この季節どここの庭にも咲いているのだが……。 （2012年10月13日）後に図鑑で調べたら、シユウメイギクだった。

24. 三毛猫ホームに参上

数日前から、三毛猫が灯油タンクに隣接するブロック塀上に参上している。

毛並みも立派なので、誰かの飼った猫であろう。いつも同じ場所において、私が車庫に出入りするたびに目と目が合う。

忘れもしない2年前、収穫前のピーターコーンと枝豆を野鼠に食され悔しい思いをした。この鼠、菜園の端の草むらでお陀仏していたのを、燃えるゴミとして焼却処分した。

三毛猫の参上によって、こうした食害は防げるだろうか。

目と目で通じ合えただろう。きつと！（2012年7月14日）

25. やっかいなカラス

カアカア、カー君への恨み話である。

こいつについては、鳥とは書きたくない。なぜか、カラスが似合っている。

つい先ごろ、こいつに菜園を侵犯された。ピーターコーンの立派なものを2本、横領された。しょうがなく、急遽、未熟なものを収穫した。

近隣で横領したトマトを嘴にして庭上を縦に飛翔し、松の枝に着地し、食している一連の動きを目にしたことがある。この動作、実に鮮やである。体操選手も顔負けである。食材の選び方も、実に”を3回繰り返したいほど、美食家そのものである。

今朝も、どこかで糖度の高い食物にありついたので、カアカアがこだましている。

こいつについては、カタカナ名でよし！（2012年9月14日）

26. カラスの足

子どもの頃、汚れたままの足で畳にあがると、「カラスに笑われるぞお」と祖母に注意されたものです。これは、カラスの足より黒く汚れているという比喻でした。幼い私は、きっとカラスの足は白いのだろうと思い込んでいました。だって、直接、カラスの足を観察したことがないからです。身近な鳥であつても、人に足元を見せるほど、近づいてはきませんでした。

それがどうでしょう、今やこの都市でも、ゴミ箱を漁る姿、畑のものを奪う姿などは日常茶飯事です。この夕暮れ時も、ロンリー (lonely)・カラスが電線上で畑仕事をする小父さんを見下ろしています。何か、獲物を見つけたかな。人とともに生きて、人に嫌われている小悪魔である。(2012年9月17日)

27. 秋の畑

「つるありインゲン豆」の棚をはずす季節になった。まだかわいい花は付いているので実は生長するが、そしてこの豆は初雪が降るまで、実を付けるといわれているが、最高気温が20度前後になると、実もシワシワになつてしまう。棚をはずしながら残つた実を収穫した。その量は夫婦の昼食に十分すぎるほどあつた。

6月初めに種を蒔き、芽が出るのを心配しながら、何度も何度も水をやった。地温が高くならないと、いくら早く蒔いても芽はでない。地中で腐つてしまう。芽が出るまで我慢して、茎が10センチメートルくらいになると、棚を付ける作業をした。竹竿が短いので、継ぎ足して、2メートルほどの高さにする。これが収穫時に踏み台をおいて私の手が届く範囲である。

『ジャックと豆の樹』にあるように、もちろん茎はこれ以上に生長する。収穫は、7月中旬からで1日おきに実を取ることでもできる。土に近い茎を抜き取ると、意外と根は浅く、枝根は極細で、これでよく(大げさに言う)と雲までも茎を伸ばすものだと思心させられた。抜いた後は、地中の球菌をやつつける(?)ために、土を掘り起こし天日にさらした。

この季節になつても初夏にやってくる外来種のセイヨウオオマルハナバチが飛来し、棚をはずす顔の近くをブンブンと花から花へと蜜を集めていた。「今シーズンは本日限りで、花粉の提供は終了です。他の畑をご利用ください。明日、おいでいただいても、ご提供できるものはございません」と、一声かけておいた。

畑には、大根、ピーマン、パプリカ、シシトウが残っている。これらを囲っていたピーターコーン、インゲン豆がなくなつて、終日、秋の陽を迎えることができるようになった。これらの野菜はこの月末にかけてギアを2段ほど上げて急生長していく。

棚はずしの作業終了後、7月中旬に蒔いた大根を抜いた。首の短い種類で土の中に長い御足を忍ばせていた。

「安心した。誰にも負けない立派な大根(足)だ!」

妻は明日の食卓に初登場させるそうです。

ピーマンの葉っぱにはまだてんとう虫が身を縮めて隠れている。フォルクスワーゲンを思わせる伝統的な姿態である。少し色が褪せて土色にみえる。これらの支柱にもいつものように赤とんぼが停泊している。一人身もいれば、交尾中のものもいる。風は秋涼、空は秋色、浮かぶ雲は秋模様、すべてが爽やかな秋晴れの好日であつた。

こんな感想を書斎の窓から午後の陽射しを受ける畑を見下ろしながら書いてみた。(2012年10月7日、日曜日)

28. 可愛くない、テントウ虫

どこから湧き出てくるのだ。この虫は。季節を間違えてないか？ 色あせて、茶褐色じゃないか。これはニジユウヤホシテントウ（28個の斑紋がある）である。これ以外に、ヒメカメノコテントウ、もちろんナナホシテントウもいる。茄子の葉っぱにあちこち穴を開けやがって。茄子はまだ生長しているのだぞ。

えい、退治してくれるわ。1匹、2匹……。あれ、葉の裏にもへばりついているのか。3匹、4匹。これだけかな？ おうおう、幹にも喰らいついている！ このやろう！ 実にはついていないよな？ 5匹かあ。多いなあ。何だ？ この黄色いネバネバは。これは血液中に含まれる嫌な匂いのする体液であり、脚の関節から出して身を守る防御液と呼ばれるものだ。えい、えい、忌々しい！ 敷石の上に落としてやれ。おっと受け身をしたな。見たぞ。許さん！ 観念しろ！ えい、踏んづけてやる。まず、つま先で潰して、その足を上げないでそのまま手前へずりずい、と引く。または、つま先を時計回りにずりずいと反転させる。このずりずいはその日の気分によってずりずい、ずりずいと反復することもある。後は、実直な蟻ンコがきれいに掃除してくれるだろう。

これらのテントウ虫は、太陽がカンカン照っていた季節にはあまり姿を見なかったが、トンボがやって来るようになってから、急に数が増えた。確か、天敵は寄生バチ、寄生ハエ、菌類であるが、そんな兵士は畑にはいない。

テントウ虫がジャガイモの葉っぱを喰い尽すところは見たことあるが、畑にはこの野菜はない。2年前に大量発生したものが土中に卵を産み、それが今、出てきているのか？ 見ている分には可愛い、野菜につかれるのは嫌だ。絶対に、絶対に、嫌だ！（2013年9月7日、土曜日）

29. 心配させてくれて ありがとう

入学した頃、友達がいません、友達をつくれなくて悩んでいたね。

でも、講義中に私語を注意したとき、君は確かに隣の友達たちとしやべっていたよ。

始めてしてくれた質問が「こんな難しい問題を解ける学生がいるのです？」だったよね。でも、半年もすると君もすらすらと解けるようになっていたよ。

研究室の書棚に詰まった本や雑誌を見て、「先生！ これ全部読んだのです？」って聞いてくれたよね。その質問へは「愚問だ！」と答えたよ。でも、愚問の意味が分からなかったよね。

必修科目の単位が取れそうにないって愚痴ってたね。

その試験勉強をしようのでテキストを貸してあげたよね。

でも、まだ返してもらってないよ。

成績を知りたくて研究室へ来てくれたね。

「自分でどう思う？」って訊いたら、十分に合格点を上回っている、と豪語していたね。でも、あれはおまけも付いた合格点だったよ。

大学以外に生きがいを見つけたといって退学の相談に来たね。

現状への不満、将来への想いを熱く語っていたね。あのときの能弁な君はかつこよかったよ。でも、両親の「せっかく、入学したのだから、ちゃんと卒業しなさい」という一言で元の鞘に戻ったよ。

半年、休学をして英語をマスターして海外の大学へ留学したい、と言ってたね。その後、休学期間は1年半になり、休学許可を受けるのに必要な面接を数回受け、在籍期間に上限のあることも理解したね。でも、留学はかなわなかったよ。

ゼミナールを無断欠席して、破門を宣告されたときは複雑な表情をしていたね。でも、あの日から大教室で顔だけは見かけられるようになったよ。

コンパでは酔いつぶれて先輩のお世話になっていたね。失敗をして酒の飲み方も覚えたね。でも、遊びではなく少しだけ学問的な話もしたかったよ。

こんなレベルでは公務員採用試験には合格しないって助言したら、君はしよげちゃたね。でも、発奮して合格したね。あのときはもつと頑張れって応援してたんだよ。

就職先が決まらなくて泣きべそをかいていたね。自己嫌悪に陥っちゃたよね。エントリーシートへの添削、模擬面接などずい分、君には時間をとられたよ。

でも、ついに内定をもらったときの瞳はキラキラと輝いていたよ。あの日はクリスマススイブだったよね。

こんなことは、みんな みくん な みくん な 些細なことだよ。人生にはもつともつと時間をかけて真剣に悩み考え抜かなければならないことが他にあるよ。

たくさん心配させてくれて、ありがとう。時間の過ぎるのは早いね。

もう卒業だね。良かったね。おめでとう。(2013年2月17日、日曜日)

30. 旭川市滞在

9月12日(木)、高速バス野幌バス停(8時25分発)より旭川市へ向った。目的は旭川市立図書館で家具職人の育成に関する資料を探すことと、美術館で絵画を鑑賞することであった。バスの進行方向、右側は朝陽が眩しいので、左側の席に座る。

走り始めるとすぐに、左側に住宅―畑―雑木林の景色が繰り返し目に飛び込んできく。いつもなら文庫本を読み始めるであるが、今日はこの景色を堪能しようと思った。そんな気分になしてくる秋晴れであった。車窓からは、きれいに区画された畑に枝豆を大豆にするのであろう、すこし黄色くなった葉っぱが見える。稲は黄金色の輝きをしていた。田舎育ちの私にはこの稲穂の

風景が一番心を和ませてくれる。そんな風景を眺めながら、この広い平原も元は原始林で覆われていたであろう、明治の開拓者たちの大汗に感謝する想いである。よくもこんな広大な耕地を造り上げたものだと感じさせられる。

車窓からはおもしろい光景を見た。トラックで運ばれる鶏たちである。ゲージのなかに所狭しと詰め込まれ、鶏たちは顔に当たる風を避けるように、うつむき加減にじっとしている。バスが追い越すとき覗き込むように見るとスピードが恐いのか風を避けるためなのか目も細めていた。あの状況であれば騒げないであろう。1台だけで護送されているのかと思いきや、合計3台見た。生きた鶏はあんなふうには運ばれるんだあ。

バスは旭川市内へ入るやいなやスピードを緩めた。私は車内アウンスを聞き、ターミナルまで乗らないで、目的地に一番近いバス停で降車した。10時10分過ぎである。美術館と図書館は常盤公園に隣接している。通行人に美術館への道順を尋ねた。

「左の突き当たりを右へ行けばいい。」

教えられたとおり歩く。信号機の上段に標識を見つけ、一度渡った横断歩道を引き返し、標識を確認して振り返ると、美術館の建物が目に留まった。

「ああ、こつちだったのか。こつちで正しかったのだな」

公園内ではイベントの会場設営が行われていた。美術館の入口には大きな銅像が建っていた。玄関へ近づき目を凝らし、

「あゝあ、休館か。11月15日まで閉まっている」

仕方ない、時間はある。公園内を散策しよう。どこの街の公園もそうであるが、ランニングをする市民、絵筆をとっている市民、ベンチで瞑想に耽っている市民など、人それぞれが自分の時間を過ごしていた。そんな中で、中国人であろうか、池の端でカモやカラスに餌を投げ与えているのを見た。投げた餌をカラスがジャンプしてナイスキャッチするたびに歓声を上げていた。して欲しくないマナーである。

図書館の位置を確認してから、散策を続けた。案内板から岩村通俊と永山武四郎の銅像が設置されていることを知った。どちらもこの地を含む上川地方に多大な貢献をした明治の偉人たちである。また数年前に、私はこの2人が登場する研究論文を公刊したこともあり、顔でも拝んで帰ろうと像を探す。岩村像は上川神社別宮の横にあり、永山像はこの公園の入口正面にあった。

「こんな顔をしていたのか」と、つい独り言が出る。

それから引き返し、公園側のドアから図書館へ入った。この図書館、けっこう面白い企画展（「文豪・偉人の素顔が知りたい！ ～ちまちま人形の生まれるまで～」を開催していた。高山美香というイラストレータがいて、彼女はオーブレンジで硬化できる粘土(FIMO)を使って文豪・偉人の姿形を創作している。彼女がこの創作活動へ辿り着いた遍歴がマンガのように紹介されていた。この人形がまた実に文豪（夏目漱石、太宰治など）や偉人（ファールブル、ベートーベンなど）の特徴を捉えているのである。横に添えられたエピソードメモも実にユニークな内容であり、よくこれだけ文献を読んでネタを見つけたな、と感じさせられた。現在は100体の作品があるそうで、1000体を目指しているとのことである。入場者のなかには写真を撮っている方もいた。それほど見ごたえのある作品群であった。

また、この図書館は利用者の便宜を図るべく幾つかの工夫がされている。2階の奥には読書（自習室）のできる部屋、飲食物を持ち込んでもいい「くつろぎコーナー」、さらに「読書テラス」といつて屋外に椅子とテーブルが用意されている。お菓子やお茶を飲みながら本やノートに目を落とす人たちもいた。私も、読書テラスの席に座り、エプソレッソ（100円）を飲みながらこの元原稿を書いた。公園に隣接しているので、野鳥のさえずりが聴こえ、のんびりした時間が流れ

る。秋の涼風は木々の葉っぱを擦れ合わせ、カサカサと音を立てさせている。空には秋の雲も浮かんでいる。

区切りのいいところまで書いてから、昼食を食べに出た。図書館の正面玄関を出て右へ左へと進むとロータリーがある。円内には、鉄のモニュメントらしきものが立っている。その角の飯屋へ入った。飯屋の前の道路をまっすぐ進めば旭川駅の正面に辿り着く。この飯屋の基本は中華のようだ。この飯屋、こぎれいで壁には旭川市の歴史を紹介した写真を貼ってある。テーブルの前にも市のHPからダウンロードした市の沿革が年表としてピンで止められていた。写真を見る限り、このロータリーを中心として色々なイベントが開催されてきたことがわかる。こぎれいな割にはレトロな雰囲気を出そうとしているのであろう。ただしレトロに凝るのであれば、店内はもっとビロード色にするような工夫が必要ではないか。その不十分さを補うためののか、有線放送では昭和歌謡を流している。私は380円の中華飯を食べた。

時間もあることだし、このまま図書館へ戻らずに、今夜の宿の下見に行こう。住所は9条15丁目左10号 旭川荘旅館である。ネットで探し当てた宿である。この住所、面白い、左10号。確かに私が歩いた道順であれば、9条通の左側に位置しているのだが、逆からもアクセスできるので、それであれば右側になり、右10号になる。右と左、何か見分ける方法はあるのだろうか。

学生時代を過ごした京都には、東入るとか西入るとか付いていた。この旅館への道中、9条13丁目の角にイチジクの木を見つけた。交差点の歩道の角にトマトと並んで植えられていた。きつ

と実は色づいて食べれる状態にはならないだろうが――実は少し干乾びた様子をしていた――、私は田舎の井戸の横にあった木を思い出した。厳寒の地にもイチジクが育つことに感動した。この9条通りにはコンビニにはあるが、飯屋は1軒もなかった。

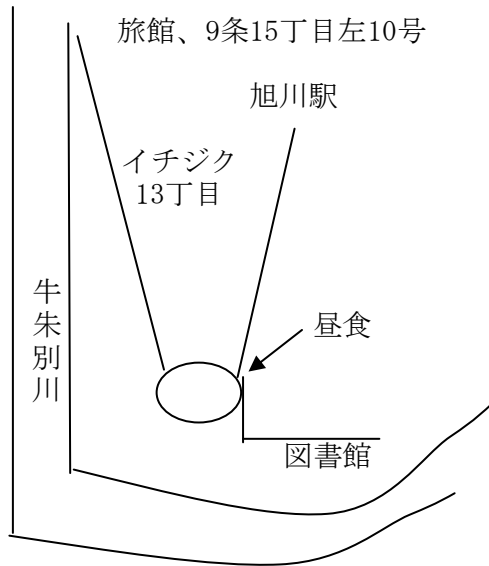
旅館の位置を確認してから、牛朱別川の土手を歩いて図書館へ戻ってきた。この川も太古から流れていたであろう。護岸は工事して整備されており、浅いがきれいな水が流れていた。この辺りであろうと左に折れると、常盤公園の緑が見える。何と図書館の道路斜め端とその奥にビジネス旅館の看板があるではないか。ネットに登録されていない旅館なのであろう。再び、図書館へ入り、午前中に座ったテラスの席でこの元原稿を書きつないだ。

その後、隣接する資料室で家具職人の育成に関する統計データや文献を調査した。ある書籍の中で職人の起業行動をアンケート調査した文献を見つけた。やはり百聞は一見にしかずというが調査に来て成果はあった。その他の必要な資料は大学の図書館を通じて借り出したい。この作業を4時過ぎまでしてから、図書館を出た。

図書館から宿への道中、コンビニで幕の内弁当を夕食として買った。泊まったのはホテルではなく、民宿風の旅館であり、1泊朝食付きで5500円であった。この旅館、褒めれるのは風呂だけかな。自宅よりも2・5倍くらい広い湯船があった。がっかりしたのは、こんな宿なので仕方ないのであるが、翌朝の朝食である。大学生協で食べれば、300円程度の内容であった。メインは目玉焼きだったようだ。9時前には、この宿を出て、バスターミナルを探した。乗車まで十分な時間があったので、お土産を物色した。どの店も開店前の時刻だったので、旭川駅内の売店で買った。駅前も買物公園も秋のイベント（「北の恵み 食べマルシェ」14〜16日）の準備でテントを張り、店を開ける準備をしていた。昨日、訪れた常盤公園でもイベントの準備をしていた。今回、宿の手配をしたとき、駅周辺のホテルが満室になっていた。きつと、このイベントに参加するお客が押し寄せるのだろう。10時発の高速バスに乗車し、野幌バス停で降車し、途中で昼食をとってから徒歩で帰ってきた。

旭川まで2時間のバス旅行である。次回は宿泊しないで日帰りで調査に行きたい。（2013年

9月13日、金曜日



3 1. かしまし男

札幌（乗車駅は新札幌駅）から函館へ向う列車の所要時間は3時間17分（7…30…11…13）であった。200ページほどの文庫本であれば、十分に読み上げられる時間である。1号車14D窓側の指定席に座った。私よりも前の駅（札幌駅）から乗車したのであろう5人連れの若者たち（男3人、女2人）も函館へ泊りがけの旅行途中らしい。

私は文庫本を読み始めた。がしかし、10分足らずで閉じた。この5人の若者たちのおしゃべりが耳につき読書に集中できないのである。中でも男3人が交互にしゃべるとりよめのない世間話が過剰に鼓膜を刺激するのであった。女2人は話題に飽きて眠っているのか、あるいは車窓からの景色を楽しんでいるのであろう、声がしない。

男たちのおしゃべりは延々と続く。結局、終着駅まで途切れることなく続いた。

日本語に「かしまし娘」という言葉がある。娘という字が付くくらいだから、おしゃべり好きな女の子を例えたものである。

この車中に限らず、最近の若い男はよくしゃべる。講義中の私語を注意されるのはたいてい男子学生である。

「かしまし男」

私にはうるさく聞こえた。だが、旅の途中の楽しみ方は人それぞれでよい。私は閉じた文庫本をバックに仕舞い、流れゆく車窓を楽しんだ。（2014年9月13日、土曜日。父母懇談会への会場（函館）へ向かう北斗4号、車中にて）

3 2. 回収率

どうしたことだろう？ 今年の年賀状、返信されてきた枚数が少ない。今年は、厳選して残った旧知の人たちのみに送ったのであるが。送付先の相手の年齢は大半が私よりも上の方たちである。

そこで、はたと思った。加齢とともに賀状を1枚52円で購入し、PCを使って作成し、プリントアウトするにも手間がかかる。ましてや外注すれば、もっと高価^{たか}くつく。この時代、メールで近況を伝えることが日常茶飯事になっていないか。

私が厳選したのは長年、逢いもせず、賀状のみで近況を知らせるだけであれば、きっとこの先も逢わないだろうから、この際、不義理にしてもよからう、ということからであった。一方、長く逢わないから1年に一度だけでも近況を知らせるのが賀状だろうという考えももちろん持っていた。しかし、前者の理由が勝って、不義理とは思いつつ厳選したのである。

しばらく考えると、かなり理解できた。今年の回収率が低いのは、旧知の人たちも私と同じような考えから厳選を始めたのであろうと。そして、私はそこから振り落とされたのであろうと。加齢とともにもっと優先すべきことがあるのだ。そう理解すれば気をもむこともない。(2015年1月15日、木曜日)

33. ワラジムシの運命

畑仕事をする私の服にくっついて来るのだろう、ときどき屋内の床をワラジムシが徘徊している。このときワラジの運命は遭遇する人物に依存する。私はティッシュに取って丸めてトイレで流す。女房は血相を変えて、ガムテープをとり走り、バリバリとテープをちぎり、ワラジに押し付け、包んでゴミ箱へ入れる。ときたま、包んだ上から輪ゴムで縛ることもある。

私は考える。きつと私の方法であれば、もしワラジが泳げるならば下水道の中で生き延びることができらるだろう。運がよければ、地上へも出られるかもしれない。一方、ガムテープに包まれたワラジはゴミ収集車に乗せられ、焼却炉へ投げ入れられるであろう。その前に、ガムテープで包まれて窒息しているかもしれない。

どう考えても私の方法がまだ慈悲深い、と思う。

こんな話をする、女房は、

「じゃあ、畑仕事をした後は、よく服をホロってから家へ入ってきてよね」と、返してきた。(2015年8月14日、金曜日)

34. 私の人生

小雨の降る公園を散歩した。アジサイの花が重そうに首を傾げていた。根元に近い茎に1匹の雨蛙が喉を震わせながら、微風に揺れる葉っぱを見上げていた。

飛ぶのか？

飛びつくのか？

やってみろ、

やってみろよ、

うまくいくかもしれないぜ。

この人生、垂れたヤナギの葉っぱに飛びつく雨蛙のようだったかな。うまく葉っぱを掴めたときもあれば、失敗して腹を地面に打ち付けたことも多々あった。でも、飛びつくことを諦めはしなかった。

さあ、飛んでみろよ、やってみろよ。(2015年9月13日、日曜日、小雨、前半はフィクションである)

35. 木山捷平について

これくらいなら、自分にも描ける、と思い込ませる文筆家である。しかし鉛筆を持ち、原稿用紙と向かい合うのだが、到底、描けない。真似をしても、およそ真似にならない。それほど単純で平凡ではあるが、巧妙な空気を繊細に描ける文筆家である。

誰かが言ったように、その描かれたものからテーマを見出すことは難しい。ただただ描くことに魂を注入した文筆家なのだろう。という木山への思いを込めて、私は私小説「つるし柿」を書いた。(2015年9月18日、金曜日、朝、曇)

36. 平々凡々

2人の息子を主人公とする物語を書きたくて、スケルトンを考えるのだが、ドラマになるような出来事が頭に浮かばない。彼らとのこれまでの日々を色々と記憶に呼び戻そうとするのだが。不思議だ。ドラマとまでは言わないまでも、長男については幾つか面白いエピソードが浮かんできた。次男についてはほとんど浮かんでこない。1人目の子供ということで長男を特別、大切に育てた覚えはない。次男にも同じ質と量の愛情を注入してきたはずだ。これまで書いたものも長男を年頭においたものが多い。それだけ彼との関係においてドラマがあつたということだろう。

次男については2本かな。無理にドラマを作らなくてもよいほど平々凡々と育ててきたということだろうか。平々凡々に勝るものない、と言いたいところだが、そのうち次男坊に謝らなければいけないかな？(2015年9月24日、木曜日、夜、曇)

37. 何か、思い出はありますか？

汚い話ではあるが、大切な話をしよう。毎日、定期的に便が出ることは身体にとってもいいし、精神的にもリラックスできる。私は、毎朝、拙宅の2階にあるトイレで用を足すのであるが、ウオッシュレットの水圧はあまり強くなく、最低限の洗浄能力を発揮するのみである。ただし、これで十分に役立っているのであるが。

便通の良くない日など職場のトイレにお世話になるが、私が独居している4階奥のトイレのウオッシュレットの水圧は尋常ではない。肛門を過度に刺激するものだから脱糞効果はきめんである。便秘気ざみのときなどもよおした以上に脱糞させてくれる。これですつきりするのである。職場の中で精神衛生をベターにしてくれるのがこのウオッシュレットといっても過言ではない。それほど毎日の通じは大切だということである。まるで自分の努力で解決しないときは、誰かの知恵を借りても問題を克服するという生き方を教えられているようである。まさに人はトイレで哲学者となるのです。

このキャンパス内にそんな大切な自分だけの場所が卒業生の皆さんにも1つくらいはあつたでしょう。ずっと、ずっと、ずっと後でいいと思いますが、また大学を、キャンパスを、教室を、教職員を、思い出してください。(卒業、おめでとーございます。(2013年3月29日、金曜日))

38. 巢立ち

今年は、カラスの啼き声をよく聞く。啼いているのは巢立ちをしたばかりの幼鳥のようだ。電線にとまり、羽を広げ、体をさかんに上下に揺らして嘴を開けて親に餌をねだっているようだ。親鳥は何食わぬ姿勢でじっとしている。それに向かって幼鳥はカアカアとせがみ続けている。完全に巢立ちができないのは人間の子供も同じだな。頭の中はカラスと変わらんようだ。(2016年8月8日、月曜日)

39. 20年振りにスイッチを、オフ、オン

20年来使ってきた灯油タンク内を洗浄するので、ボイラーのスイッチを切っておくよう業者から指示された。ボイラーは玄関フードのボイラー室にある。女房と頭をつき合わせてスイッチを探したが、どこにも見当たらない。ボイラー本体の側面に「スイッチの位置」という表示を見つけた。「外にないので、内側にあるのだらう」と判断し、ドライバーで蓋を開けたみた。たくさん配線はあるが、スイッチらしきものはない。「これじゃないの」と女房は配線を束ねた金具を指し示した。

「これじゃないだろ。下手に素人が触らんほうがいい。〇〇住宅さんに来てもらえ」と私は助言した。

翌日、この家を建てた当時の住宅設備屋であるお兄さんになって来てくれた。ボイラーを見るなり、「内側にあるのかな」と言って、蓋を開けてみた。昨日、我われ夫婦がしたのと同じ作業をした。

「ないなあ。ケーブルが延びているので、家の中にありませんかね」と訊かれた。

「この家を建てて、20年になるけど、ボイラーのスイッチは切ったことがないですね。どこにあるのかなあ」と逆に尋ねた。すると「台所か風呂場にあるはずですが」と教えてくれた。「すみません。部屋へ入って探してください」と、お願いした。

「風呂場はここです」

「ああ、これですね。このスイッチです。これをオフにすれば、ボイラーは作動しませんから」と言って、20年前のお兄さんはオフにして見せた。

「ああ、これですか。20年間、触ったことがないですね。オフにしたのはあなたが初めてですよ」

思わず、こんな感動した声が出た。

「ボイラーが20年ももっていること自体がすごいことですよ。通常、2回くらいは取り替えますからねえ」と小父さんになった昔のお兄さんも感動していた。

きつと試運転のためにこのスイッチに最初に手を触れたのはお兄さんであつたらう。そして、また20年振りに触ったのも小父さんになったお兄さんであつた。長く住み続けても自分の家のことで理解していない部分がまだ他にもあるかもしれない。(2016年9月10日、土曜日、小雨のち曇)

40. 散歩の途中で2回、虹を見た

このところ、創る創作文の内容は私小説風で、決して明るくはない。私小説風になるのは、今しか書けないテーマだからである。振り切りたいことがあつて書いているからである。その振り切りたいこととは息子のことである。

休学期間が終わり、復学し就職活動中の長男からは朗報どころか、明年3月に卒業した後の進路すら連絡がない。これがずっと気にかかっているのである。このところ彼は私の創作文のアイデアの倉庫になっている。

この夕方散歩をしながら、頭のなかで「小説 色づかないパプリカ」の修正と加筆作業をしていた。どうしてもうつむきがちになる顔を上げると、遙か遠く、灰色雲のなかを大きな虹の橋が掛かっていた。家を出る前に通り雨がパラパラと落ちてきたが、その副産物であろう。虹を見るなんて、久しくなかった。必ずしも明るくない私の心に一点の灯がともったように嬉しくなった。いつもの角を曲がり、大きくUターンをして、虹に背を向けて歩いた。数十分後、振り返って見ると虹は薄くなつてほとんど消えかかっていた。

60分ほど歩いて町内へ戻ってきた。右に曲がって虹を確かめてみた。なんと消えかかっていた虹は鮮明さを取り戻し、さらにもう1本その下にほぼ同じ大きさの虹が弧を描いていた。何か、嬉しい予感がした。

「これからいいことがあるのかな？」

いつもなら町内をぐるぐる回ってわが家へ戻る道をショートカットして急ぎ足で歩いた。家に着くなり、リビングの窓をトントんとたたき、顔を寄せてきた女房に知らせた。

「おい、大きな虹が2本、掛かっているよ。お前も見に出てこいよ」(2016年10月10日、月曜日、体育の日、肌寒い)

4.1. ある学者の退職パーティでのスピーチ

本日は、このような退職パーティを、この私のために開催していただき、心よりお礼を申し上げます。また、学部の先生方は研究時間を最も確保できるこの3月上旬に、この席へご出席していただいて、本当にありがとうございます。

前の職場で11年、本学で23年、合計で34年間教育と研究に専念してきましたが、大病を患うことなく今日、退職の日を迎えることができました。自分でも感慨深いです。幹事の〇〇先生からは三分程の挨拶をしろ、という要請がありましたので、させていただきます。若い先生方もご出席していただいていますので、年寄りの回顧談だと思つて聞いてやってください。飛ぶ鳥、後を濁さず、といいますが、たとえ濁す言葉があつても必ず飛び立ちますので、ご容赦願います。

いつの時代もそうですが、大学院生が大学に職を得るのは大変です。私もそうでした。その頃からの思い出を3つしやべらせてください。

1つ目は大学院時代の思い出です。指導教授からは研究姿勢として「他の研究者たちから先行研究として論評されたり、参考文献として挙げてくれるような論文を書きなさい」と諭されました。事実、このアドバイスを実現するよう努力し、内外の専門雑誌に公刊した論文のうち10本ほどが先行研究として取り上げられています。なので、指導教授の教えを自分なりにクリアーできたと思います。

でも、研究者の職を得るまでには時間がかかりました。大学院を修了して、任期付きの助手に採用されましたが、それからは悔し涙を幾たびも流しました。多くの大学や短大へ書類と論文を送り、教員公募に応募しましたが、なかなか採用されませんでした。送った論文が読まれた形跡のないまま返却されてくるたびに悔しくて、悔しくて酒を飲んで憂さを晴らし、また頑張りました。指導教授からは、「いい論文を書けば、向こうから雇いたい、と声を掛けてきますよ」とさらなる励ましを受けるばかりでした。そのたびにレベルの高い雑誌を目指して努力しました。そんな困難があつて、ようやく30歳を過ぎて、大学に職を得ました。

就職後は新任の教員を採用する人事委員にも何度も選ばれました。毎回、不採用として落とさなければならぬ方には本当に申し訳なく思いました。自分の若い頃と重なって、落とされた候補者はまた苦労を続けるのだな、とその心の内を思い遣ったものです。とくに、自分が定職を得た33歳を上回る方を落としたときには、別の大学で必ず雇ってもらえるよう幸運を祈りました。その分、自分は定職に就いて恵まれているのだから、しっかりと論文を書かねば、本当に申し訳ないと反省もしてきました。

最初に職を得た大学でも大きな思い出があります。それが2つ目の思い出です。それは学生指導に関わるものです。希望しない大学へ入学してきた男子学生がいて、退学をしたいと言ってきました。私は退学のデメリットを教え、なんとか勉強を続けて卒業するよう説得しました。それが教員の務めだと考えていました。彼とはずいぶん、話をしましたが、どうしても大学の雰囲気嫌だということで、退学しました。その間、保証人である父親にこの件について確認べく電話連絡をしました。開口一番、父親は私の学歴を訊いてきました。不思議な思いで、それとなくいなしましたが。次に、父親は私が所帯持ちか否かを問うてきました。これについては、「独身ですが」と答えました。すると、「結婚もしていない者、子供を育てたことのない者に子供や親の気持ちが解るのか？」と詰問されました。私は「理解しているから退学せずに、勉強を続けるようアドバイスしているのです」と強い口調で答えました。後に、この答えは思慮が浅かったと思ひ直しましたが。父親はこれには返答せず、とにかく息子は退学させるの一点ばりで終わりました。悪い後味が残りました。

「結婚していない者、子供を育てたことのない者は教育者にはなれないのか？」ということでした。しばらく悩みました。答えは出ないし、気分も晴れませんでしたので、年上の先生に相談しました。

「我われ、教員が干渉できることにも限度がありますからね」と先生は「当事者の意志を尊重してあげれば、トラブルは大きくならないでしょうね」と親身に教えてくれました。それでも「子供を育てたことのない者に子供や親の気持ちが理解できるのか？」という言葉が結婚して、自分の子供たちを育てても、なお心に残りました。が人の親になってあのときの父親の心境を少しは理解できたと思います。「子を持つて知る親の恩、親の心労」とも言えましょうか。

3つ目の思い出は、その最初に勤めた大学で老先生から言われた一言です。

「論文を書いて偉い人にはなれないよ」

大学院では、恩師から大学では教育も大切だけれども、まず専門家に認められる論文を書きなさい。それが教育に反映され、さらに世の為になれば最善である、ということ論されてきましたので、老先生のこの言葉は就職をして日の浅かった私には理解できませんでした。

でも、自分が年を取って、論文のアイデアも浮かばなくなり、また気力も薄れてくると、この言葉の意味が理解できました。「偉い人」とは、学内でお金を稼げる人ということだったようです。論文を書くよりも学内行政に精通する人物になれば、役職にも就け、お手当てが入手できることだったようです。この点、私も△△長を複数年やらせていただけで、ずいぶん、金銭的には助かりました。当時、子供たちが大学生になったばかりで、月給の半分が仕送りで消えてしまいましたので。若い先生の中には、論文を書かない同僚に不満を漏らす方もいました。昇格前にのみ論文を書いて早めに教授になってしまえば、後はもう上がりようがないので、行政に精力を使うのか、それとも研究者になりたかった若い頃の気持ちを持ち続けて、論文を書き続けるのか。金と学問を天秤に掛けているようで、嫌な気分になったこともありました。

教員の口から研究とか論文という言葉すら出てこない、この2語が禁句のような雰囲気の淀むそんな大学の学生たちが勉強をするはずがありません。彼ら彼女らには、ことあるごとに、「本を

読みなさい、勉強しなさい！」と声をかけてきました。

私は、偉い人にはなれなかったけど、お金も十分に貯めることはできなかったけど、内外の研究者たちが先行研究として取上げてくれる論文を公刊できたことを誇りに思います。学者が仕事で貢献できる領域はしよせんそんなちっぽけなことなのかもしれない。自己完結を目指した学者人生でした。

長年、本当にお世話になりました。(2016年11月21日、月曜日、大学のPCで入力)

42. 人の口に戸は立てられぬ

― 落ち着かないようすで若い教員が研究室へやってきた。

「コンコン。先生！ いま、お時間いただいてもよろしいでしょうか」

「はっ、はい。大丈夫だよ。慌てて、どうしたの？」

「はい。自分の学生たちへの教育姿勢は間違っているのでしょうか？」

「突然、どうしたの？ あなたは十分すぎるくらい熱心に指導してくれてますよ。私なんか見習わないといけないと思うこともあるもの。それにあなたは学生からの授業評価も高いでしょ。だから、ゼミ活動への予算補助もしてあげてるじゃないですか。どうしたの？」

「はい。今回の新規採用人事の選考委員に選ばれて先日、候補者への模擬講義を聴いて面談しました」

「ああ。じゃあ、次回の会議で決定だね」

「はい。でも他の委員が推している方を僕は支持できなくて反対しているのですよ。3対1で負けてます」

「いいじゃないか。反対していいんだよ。人を雇う重要な仕事を任されているのだから、反対する理由があれば反対しなさい。なまじっか、なあなあで採用しても、その後、うまくいかないからね。あなたも知ってのとおり、現に数件、そんな事例があるじゃないですか。優秀な人を雇うには誰が選考委員に選ばれるかに依存するからねえ。だから、選ばれた人は大変さあ」

「はい。1人に絞った候補者は東京の大きな会計事務所に所属していて、〇〇〇会計士の資格を持つている実務家です」

「最近、どこの大学も学問よりも実務家畑を欲しがるよね。学問を軽視してるわけじゃないけど」「この話は公言しないで欲しいのですが、この候補者との面談でのやりとりを聞いていると、どうも教育者として相応しくない、と僕は思いました。面談中、教育に力を入れたいという言葉は一言も出てきません。就職後は、アメリカの大学へ留学をしたいとか、今の仕事も兼職して続けたいとか。教育者になるんじゃないかと、大学に職を得たいだけ、という印象しか残りませんでした」

「そう。他の委員の評価はどうなの？」

「彼らは、〇〇〇会計士とか、所属先の知名度に引っ張られているようで、こんな立派な経歴のある方を採用できる機会はまたとない、と言って大賛成してますよ。僕は教育者として相応しくないって言い続けました。他のメンバーからすると、僕の学生への教育指導は度がすぎているとも言われました」

「それで、冒頭の『教育姿勢は間違ってますか？』っていう発言があったんだね」

「はい」

「度なんかすぎてないよ。おおいに評価してあげるよ。これは私からのアドバイスだけど、あなたが本当に嫌であれば信念をおしなさい。我われは誰かに信念を曲げられるような姿勢で教育も研究もしているわけじゃない。あなたはあなたの信念をおすべきですよ。必ず、どこかでサポートしてあげますから。それで選考委員会での結論はどうなったの？」

「はい。会議にかける前に主任が委員を1人ずつ呼び出して、可否の判断を確認するそうです。つまり、反対している僕を説得するようですよ」

「それはよくやることなので、説得を受ければいいでしょうね。でも説得の仕方や内容に合意できなければ、あなたはどこまでも信念をおすべきですよ。折れることはない。会議へは全員で合意したものを上げて欲しいですから」

「はい。分かりました」

― 数日後、彼は再び私のところへ来た。うすら笑いを浮かべて口を開いた。

「先生。先日のですが、次回の会議に上げるようです」

「じゃあ、あなたも合意したんだ。選考委員全員が合意していれば、投票もうまくいくよ」

「いいえ。僕は反対意見とおしました」

「はっ。そう。それで主任からはどんな説得を受けたの？」

「それがですねえ。主任だけじゃなくて、長老もそうですが……、この件について会議の席上、僕は反対意見をしゃべると伝えたらですねえ……、言われちゃいましたよ」

また、彼は含み笑いをした。

「何て？」

「君のこの職場における今後のキャリアは保障しないって」

「んんっ？　なんて？　主任や年上の教員がそう言ったの？」

「はい。腐ってますね。はっはっはっ」

彼は歯を見せて笑った。

「そりゃあ、説得になってないわ。脅しだわ。パワハラだな。こりゃあ呆れた。この件は投票にかけても流れるわ、きつと」

「彼らは所属組織や資格に目が奪われていて、一番大切な教育をみてませんから。僕は会議では反対意見をしゃべります」

「いいんじゃない。信念をとおせばいいよ。フロアーの我われは選考委員の考えや感想を聞いてしか判断できないからね。でも、よくまあ、今後のキャリアを持ち出したねえ。教育と研究を頑張ってる若い教員に言っただけじゃないことだよ。あなた、組織の中で偉い人になるために、この職に就いたわけじゃないでしょ」

「もちろんです。研究をとおして、人のためになる仕事をしたい一心で大学院へも進学しました。そんな仕事の一端を教育にも反映させようと思ってやってきました」

「それでいいんだよ。何も間違っていない。説得した人たちは何を考えているのかなあ。分からんなあ？　どうしても採用したければ、私なら違った方法で説得するけどねえ」

「これは文句ですが、論文も書けないヤツが論文審査をできるのですかねえ？　彼らは10数年、書いてないですよ。いや、書けないのでしょうかね。大学教員ですよ。我われは」

「あなたのように毎年、活字を出している方からすれば、そう思うのも当然でしょうね。この世界ではね。だから、我われは3年に1本くらいは活字を出すよう自分にノルマを課す必要があるのですよ」

「この世界では論文を書けない人が偉い人になってますよね」

彼は怖そうな目をして言った。

「おうおうにしてそうかもしれませんね。論文を書く人はどうしても雑事に疎くなるんですよ。ところが書かない人は時間に余裕があるので雑事に関心が向き、色いろと情報を集めたり根回しをしたりして、偉い人になるんです。どこの組織も似たようなもので、正論を口にする人は少数派になりがちですよ。でも、この少数派がいるから学問の自由や自治が保たれるんですよえ」

――無理やりちぢめられたゴムひもは、いずれは反発して伸びきる。これと同じで、脅しを受けた者は組織が肝心な意思決定をするときに、何十倍もの勢いで反発する。その結果、その話し合いは決裂する。

会議では、主任からの説明後、若い教員はしつかり反対意見をしゃべった。私もやんわりと反対意見を幾つか出した。反対している委員への説得もしたのか、と訊いた。フロアーからもこれまでにいく質問が出た。さらにこんな場合、発言することのなかった教員までが質問していた。普段、黙っている人のほうが口を閉じない人よりもよく聴いているということさえある。そんな人が発言するときはその真意を汲んであげるべきである。予想したとおり、投票後、この件は承認されなかった。後日談。

「あなたが主任や年上の教授の立場を守ってあげたことになったんだ。だって、あの会議でフロアーからどんな説得の仕方をしたんだ。その内容を訊きたい、という質問があれば、彼らは、『この件について反対すればキャリアを保障しないって説得した』と答えざるを得ないよね。こんなことを会議で彼らが公表すれば、どうなっていたかね。これはパワハラ、脅しだよ。投票しても否の数が増えただろうね。いや、全員が否に丸を付けたかもしれないよ。そうならなかったのだから、あなたが我慢したおかげで彼らの立場は守られたってことですよ」と、私は彼のたった言動を再評価してあげた。

「そうですかね？ 潰されて恨んでるんじゃないですかねえ？」

「あなたは正しいことを言ったままですよ。みんなで投票した結果ですからね。私が赴任して2年目くらいだったかな。違う件で若い教員が別室に呼ばれて、彼の言葉だと監禁状態で、自分の提案を取り下げるよう年上の教員に脅されたことがあったみたいだよ。彼はその件では主任だったので、責任感も強かったんだね。別の会議で自分は監禁されて脅されることがあったので、この主任を降りたいって説明してたよ。でも、フロアーから誰も彼を弁護する意見は出なかった。彼はすべての泥を自分で被ったんだ。被らずに、こんなことが自分に対しておこなわれたから組織として改善しろって言って、主任を続けるべきだったと思うよ。引いてしまったから、また弁護する者がいなかったから悪者でない彼が悪者になったんだ。だから、今回、あなたのとった言動は間違っていないよ。自分の信念を曲げることはない。信念を貫いたからといって、組織が絶対に絶命に陥ることもないしね。頭を冷して、時間をかけて再募集すればいいだけじゃない。何も人を脅して採用するほどの人物でもないだろ。もし採用されていたとして後日、選考委員が脅されて、採用されることになったということが本人の耳に入れば、本人はどんな思いをするかね。そう考えると今回、不採用になってよかったんですよ。人事くらい公明正大にやりたいよ」

「そうですよね。普段、正義だ、公正だ、とか学生に教えている立場ですからねえ、彼らは。言ってることと、していることがちぐはぐですよ。腹立ちますよ。ほんと」

「ああ、思い出したよ。こんなこともあったなあ。これは聞いた話だけど、自分の知り合いを採

用したくて他の委員が推してくる候補者の論文を盗作呼ばわりした選考委員もいたそうだよ。もちろん、他の選考委員たちには理性があつたので、その妄言を吐いた委員をやり込めたそうだけどね。だから、会議では選考委員全員の一致でもって推薦しますってことで採用されたよ」

「盗作呼ばわりですか？ 間違つてれば、裁判沙汰になりかねませんよ」

「そうだね。盗作でないものを盗作って言ったようだから訴訟になりうるよね。名誉毀損だな。こと人事になると人格が変質する教員もいるからね。だから、本当は関わりたくないよね」

「その話、その後、どうなったのですか」

「ああ、興味ありますか？ 採用後に、採用者の耳に入つたようだよ。もちろん、表面上は何もなかったような涼しい顔をしてるけど、論文や研究について盗作呼ばわりした教員への風当たりは強くなった。人事では一本釣りを決めてないかぎり、自分の知人を俎上に乗せるべきではないと思うね。うまくいったとしても後が大変だよ。主従関係が生まれるし。子分を作りたいのかねえ」

「偉い人になるには子分も必要なのでしょね」

「今回の件もそうだけど、偉い人になっている人は自分の立場を利用したくなるんだろうね。最後に、どんな利害があるのかね。私には分からない。それよりも論文とか研究という言葉を学生たちの前でも口にして、彼らがもつとみずから勉強するよう啓発して欲しいよね」

― 後日、別の若い教員が私に声をかけてきた。

「先日の会議、僕は反対票を入れましたよ」

「そんなこと口にするもんじゃないよ」

私は強い口調で論じた。

「終ったことですし、いいじゃないですか。でも、あの採用したいという趣旨説明じゃあとうてい可は入りませんよ。それよりもなぜ反対票を投じたか分かりますか？」

「そりゃあ、あの雰囲気なら否になるよ」

「いいえ。先生がやんわりと幾つか意見を出されていたので、これは否にすべきだと考えたからですよ」

「なにも私の意見に引つ張られることはないよ」

「いいえ。でも先生は何か大切な裏情報を持っていて、意見されたのでしょ。多くの若い教員たちは気づいたはずですよ。ふっふっふっ」

「んんっ。そうだなあ。『人の口に戸は立てられぬ』からねえ」(2016年12月25日、日曜日、朝、晴れ)

注。本稿はフィクションであり、筆者に勤務する組織とは一切、関係ありません。

43. 逆襲か？

「お昼と夜、何か食べたいもの、ある？」

「昼は冷たい蕎麦がいい。夜は何でもいい」

「昼は蕎麦ね。じゃ、夜は刺し身にするわ」

「いいよ。買物に行くのか？」

「うん」

「どこへ行くんだ」

「今日は土曜日だから、駅前のラルズへ行く」

「ついて行ってもいいか？」

「うん。いいけど」

ということで私は女房と一緒に家を出た。

女房と買物に出るのは久しぶりである。

「どのコースで行くんだ」

私は訊いた。

「2番通りに出て、信号を渡って、左に曲がって、真っ直ぐ行く」

女房は散歩をかねて、少し遠回りをしてスーパーへ行くと言う。

信号を渡って、私は声をかけた。

「もう一つ向こうのポリボックスまで行ってから左に曲がると、もう少したくさん歩けるぞ」

「この道が静かだからいいのよ」

「そうか。俺が散歩するときは、向こうを歩くけどな。この道はほとんど歩かない」

そんなたわいのない話をしながらスーパーに着いた。私は薬局で水虫の薬を物色してから、女房の後ろ姿を探した。女房は麺類コーナーにいた。後ろから声をかけると、ウドンを持ち上げて、

「昼は焼きウドンでいい？」

と訊いてきた。

「昼は冷たい蕎麦にしてくれと家を出る前に話したじゃないか」

私はむっとした口調で答えた。

すぐに女房はウドンを戻して、蕎麦をカゴに入れた。清算を済ませ、買物をマイバックに詰め、それを私が背負った。

「帰りのコースはどっちだ？」

「来たコースを逆に帰るのよ」

「そうか」

並んで歩いた。信号のうんと手前に来たとき、道路には車が走っていなかった。

私は「この道を横切らないのか？」と声をかけた。

「車が来ないときは横切ってる」

「そうか。真面目に信号まで行って横断歩道を渡っているのかと思ったけど……。横切るんだ」

2人してゆつくりと横切った。その先は公営住宅があり、その駐車場を横切ると2番通りへはショートカットできる。

「ここも横切るのか？」

「いいえ。いつも真っ直ぐ行ってる。他人の敷地に入るようで……」

「横切れば、近道だぞ」

私が促すと、女房も一緒に駐車場を横切った。

「道路は横切っても、ここは横切らないんだ。変なところで律儀なんだな」

女房は無言で応えた。

自宅の1本右隣にある道路まで戻ってきたとき、左足の土踏まずの前部が突然、チクチクした。靴の中でその部分の足を浮かせた。下ろすと、チクチクする。その痛さは針で刺されたようだった。

「痛、痛、痛い」

「どうしたの？」

「うん。なにか足の裏に刺さったみたいだ」

私は左足の靴を脱いで、中を覗き込んだ。針のような細い金属が垂直に刺さっていた。女房は私から靴を取り、靴ひもを弛めた。

「どこよ」と覗き込んだ。

「かしてごらん」

私は靴を取り戻し、靴ヒモを外したペーロの部分ベロンと引き上げて、覗き込んだ。

「刺さっている。これ、押しピンかな？」と言って、女房にも見せた。

「その辺にある小石を取ってくれ」

女房から渡された小石で靴の内部から針のような物を外へ押し出した。抜いてみると、一センチ近い針先のような金属であった。靴は底のゴムが柔らかくて薄いウオーキングシューズである。針であれば簡単に刺さる。

「道路の溝に押しピンをひっくり返したようになっていたんだな」

「皮肉を言うから、罰が当たたんじゃないの？」

「……」

針のような物が刺さったのは事実です。(2017年6月17日、土曜日、晴れ)

44. イジメられているのは…

― 授業開始時刻よりも3分早く教室へ入った教授は、最前列の席に座りスマホを操作している4年生の男子学生に声をかけた。

前の君、君、君だよ。内定、もらったかい？

― 男子学生、顔を上げ、めんどくさそうに答える。

「はい。5月中に3社からもらいました。すべて同じ業界です。超売り手市場なので、就職なんてちよいもんですよ。ふっふっふっ」

よかったね。で、どこからもらったの？

「アooooooooトですよ」

んんっ？

「早い話がパ○ン○屋さんです」

どんな入社試験を受けたの？

「いきなり店長面接をされ、即決ですよ。バイトみたいでしたあ」

ペーパー試験は？

「面接オンリー。人物第一主義ですよお」

そうかい。でも、この科目の単位を取らないと……。必修科目だから卒業できないよね。

「バイト優先で、シフトがあつて4回休みましたけど、それ以外は全部出席してますよ」

これまで8回講義したけど、そのうち半分を休んだんだあ。出席だけじゃ、単位はでないよ。

「ほう。他の科目はどれも教室に座っているだけで単位が取れました。楽勝、楽勝でした。自分、ヤバイすっかー」

とにかく頑張るなさい。

「いいえ。もう就活は終わりましたから」

違う！ この科目のことだよ。

― ちょうど、講義開始時刻となった。

じゃあ、講義を始めるよ。今日は需要曲線と供給曲線の描き方、その交点の求め方を復習します。理解できたかどうかを来週、小テストで評価するから。内容をよく理解するように。

需要とか供給という言葉は高校生のときに『政治・経済』の教科書で習っているからね。また、あなたたちは大学へ入学して4年間どこかの講義で必ず聞いてきたでしょ。この講義はその復習だから。

需要曲線とは需要 D 、あるいは購入量と価格 P との関係をグラフに描いたものです。関数では、

$$D = f(P)$$

と書きます。関数は中学校で習ったよね？ 右の P と、左の D を関係づけているから関数っていうんだね。

供給曲線とは供給量 S 、あるいは生産量と価格 P との関係をグラフに描いたものです。関数では、

$$S = f(P)$$

と書きます。ああ、記号の f は関数 function の頭文字を取ったものだよ。中学の算数の教科書にも書いてあるから。

次に、具体的に式で書きます。

$$D = -3P + 110$$

$$S = 2P - 10$$

― 教授は振り向き、大きな声を出す。

後ろの席にいる人たち！ 横を向いてしゃべってないで板書したこと、私が説明していることをノートに取りなさい。ノートを取らないと、復習にならないぞ。試験ができない学生にはノートを提出させることもあるから。分かったかい？

で、話を戻すと、これは一次関数だからね。右辺の110とマイナス10は定数なので、左辺と関数関係にあるのは価格 P だけだね。こうも書ける。

$$D = -3f(P) + 110$$

こう書くと、関数の意味が分かりやすいだろ。価格 P が上がったり、下がったりすると、左辺の数値も変化するということです。ここまではいいですか？ 関数の意味は中学1年生のときに習っているはずだから……。大丈夫ですね？ P が上がると、 D は減ります。逆は逆です。 P と D とは反対の方向へ動くので反比例の関係にあるといいます。よって、グラフは右下がりにつけてます。

次に、 P が上がると、 S は増えます。こちらも逆は逆です。 P と S とは同じ方向へ動くので正比例の関係にあるといいます。グラフは右上がりに描けます。

これも、

$$S = 2f(P) - 10$$

と書けば分かりやすいでしょ。どちらの関数も P が主語です。 P は D と S の動きを説明するの

で説明変数、 D と S は説明されるので被説明変数とも呼びます。他の科目でも聞いたことがある
だろ。

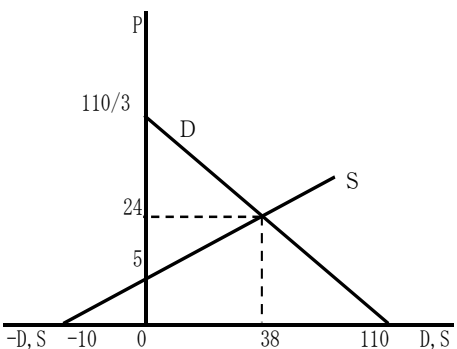
そ、そのこのバックの中を覗いている彼女、これ、聞いたことあるでしょ。

「……」

んんっ。ここまでの説明は理解できましたか？ 中学生レベルの内容なので大丈夫でしょ。

ああ。窓側の、その彼女！ あなた、あなただよ。何してんの？ 手鏡なんか出して。教室
で顔や髪を整えることあないでしょ。鏡と櫛を仕舞いなさい。いま、授業中だよ。授業に集中し
なさい！

じゃあ、次に、この2つの関数をグラフに描きます。こう描けます。



2つのグラフの交点の座標が買い手と売り手にとって望ましい価格と数量になります。なので、

$$D = S$$

とおいて、解くよ。

$$-3P + 110 = 2P - 10$$

$$P = 24$$

これを D 、あるいは S の式に代入すると、

$$D = S = 38$$

となります。

まとめると、取引価格と取引数量の組合せ、あるいは交点の座標は、

$$(P, D = S) = (24, 38)$$

と求まります。

このように式がグラフに描けて、取引価格と取引数量の組合せが求められれば、いいんだよ。
簡単だろ。一次関数の描き方さえ知っていれば、中学生でも描けるよね。君たちは大学4年生だ
から……大丈夫ですかあ？ 何か、質問、ありませんか。来週、この数値を変えて、小テストを
しても解けますね？

誰も質問しないってことは、ここにいる75人全員が、これを理解できたということだね。

あゝあ、その君、ドアから2列目の席にいる君だよ！ パンを食べるのは止めなさい。今は
食事時ではなくて、講義中だよ。後で食べなさい。えゝと、質問はない。大丈夫かな？

「先生！ 質問してもいいですか？」

はっ、はい。質問しなさいって言ったでしょ。

「 D って、なんですか。Sって」

ああ、そっかぁ。ごめん。これは英語だよ。需要は英語で Demand というんだ。その頭文字の D を取ったもんだ。供給は Supply というので、その頭文字の S をとって S と書いているんだ。ちなみに P は価格 Price の P だよ。高校の教科書にも出てるし、他の講義でも頻繁に聞いたことがあると思うけど。思い出してごらん。

「ふーん。でもなぜ、こんなグラフになるのですかぁ」

これかい。基礎中の基礎だね。こうすればいいんだよ。この式はどちらも一次関数だから。中学1年生のときに関数や一次関数の意味は習っただろ？ ねえ、君！ 君だよ。いま、質問した君だつてばぁ。窓の外を見て、どうしたの？ 君が質問したんだよ。

「どんな質問だったですか」

おい。しつかりしろよ。自分が言ったことを忘れてどうする？ まるで鶏みたいだな。

「えー。俺、鶏ですかぁ！？ マジすつか？」

違うよ。すぐに物忘れをすることのたとえだよ。『鶏は3歩歩くと忘れる』。こう言うんだよ。たとえだよ。悪くとらないでくれよ。で、一次関数の意味は中学生のときに習っただろ？

「確かぁ、曲がつてないヤツですよ」

そうだ。一次関数は絶対に曲がらない。直線だ。私は曲がつたことをする人間が一番嫌いだ。人間は実直に生きるべきだ。うん。だから、たて軸切片とよこ軸切片を求めて、その点を直線でつなげばいいんだ。

「先生！！」

おっと！ びっくりした。大きな声だね。はい。

そちらの君、どうしたの？ 顔が真っ青だよ。

「2つ質問があります」

どんなことかな？

「需要曲線、供給曲線って、曲線って言ってるのに、なぜ直線になるのですか」

偉い。君は偉い！ いい質問だ。私は嬉しいぞ。それは直線も曲線の一部、逆に曲線も直線の一部と考えてください。たとえ、式が一次関数で与えられても、曲線と呼んでいるんだ。これは慣例だから。深く考えないことだね。もう1つの質問は？

「はい。その切片とはどうすれば分かるのですか。僕にとっては人生最大の難問です」

うーん、そっかぁ、そっかぁ。

たとえば、

$$D = -3P + 110$$

だとグラフに描いたように必ず、たて軸に P 、よこ軸に D を取るので……。いいかい。よこ軸の D の値を求めるためには、たて軸の P はゼロだよ。そうすると、 D の値はいくらになる？

さっきの君。どうだ。

「分かりません。そこんところがどうも……」

そうだったな。ごめん。私の認識不足だった。非は私にある。うん。

P がゼロだから、この式の P にゼロを代入する。そうすると、君！ D はいくらになる。

「……」

難しいかぁ？

「はい。俺、かなりヤバイです」

そうか。

$$D = -3(0) + 110$$

$$3 \times 0 = 0$$

だね。

だから、

$$D = 0 + 110$$

で、

$$D = 110$$

となる。これがよこ軸切片だよ。分かったあ？

「なるほど。うまく解けるもんですね」

そうかあ。じゃあ、次はたて軸の P の値を求めるので、よこ軸の D の値をゼロとおくんだ。そうすると、さっきと同じようにしてえ、 P の値を求めると、

$$0 = -3P + 110$$

と書ける。はい。 P について解くと、今度は、4列目で GAP のTシャツを着ている君！そう、ボーとしている君だよ。いま、振り向いた君だ。目を開けて眠っているようだね。まるで魚じゃないか。しっかりしろよ。これ、どうだ？

「……」

無理かあ。残念だなあ。じゃあ、私が解こう。

$$P = 110 / 3 = \text{約 } 36.66$$

となる。

大丈夫かあ？ GAP の君と……、その後ろの彼女！ 1列、2列、3列……、6列目に座って下を向いて、スマホをいじっている彼女、あなただよ。いま、顔を上げた、あなた、大丈夫かい？ こんな大事な話をしているときに何、してんの？

「スマホの電源が少なくなってきたので……」

後にしなさい。この計算、どう？

「ええ。分数の割り算じゃないですかあ。割るなんて嫌です。誰かに嫌われているようで」そうかあ。人生は割り算よりも足し算で生きたいよな。歳を取れば、引き算になるが。んんっ。でも、今はこの問題を解かなきゃならない。割り算は小学生のころに習っただろ。

「落ちこぼれだった悪夢のような小学生のときを思い出させないでください。もう頭が真っ白です。わたしは来年3月に大学を卒業する予定の大学生ですから。過去は忘れ、未来志向で生きたいです！」

そっかあ、そっかあ。落ちこぼれ、悪夢かあ。じゃあ教えるよ。こんな計算の仕方を習っただろ。

$$\sqrt{110}$$

どうだね。

「一杯一杯です」

他のみんなはこの計算できるよなあ？

「……」

おい！ みんな下を向いたり、横を見たり、眠てたりしちゃあ、理解できんだろ。卒業できんぞ！ そのさっきの君！ パンは後で食べなさい。彼女、手鏡は仕舞いなさい。何度、言わせるんだ！

××大学経済学部 必須基礎科目「超入門経済学（1年前期配当、2単位）」の4年生への補習

授業は遅々として進まない。(2017年6月18日、日曜日、晴れ)

45. そりゃあ、ないだろ

――居酒屋にて。中学生時代の同級生が酒を酌み交わしている。

棟梁 俺たちも、年をとったなあ。

教員 中学を卒業して40年が過ぎたんだ。あたりまえだ。お前は俺よりも成績が良かったけど、進学せずに、大工の道へ進んだよな。あのとき、俺はお前が立派に見えたよ。

棟梁 なぜ？

教員 あの若年で一生食っていく道を見つけて、そこへ進んで行ったのだから。当時の俺にはとてうていできない意思決定だった、と思う。

棟梁 そんな大層なことじゃない。ふっふっふっ。親に金の余裕がないことくらい息子であれば、分かるさ。早く自活して、親父とお袋を楽にさせてやりたかっただけのことさ。そのために、手に職をつけたかったのよ。

教員 それが立派だっていうんだ。今じゃあ、日本一の棟梁で人間国宝にでもなるっていう人物になったんだから。

棟梁 ただ目の前にある与えられた仕事を一生懸命こなしてきただけだあ。お前だって、好きな勉強の道で他人が認めてくれる大きな仕事を幾つか残したじゃないか。なりたかったんだろ、大学の先生に。俺よりも立派だって。世間様の役に立つ人材を育ててきたのだから。

教員 そうでもないぞ。お前のように一流の大工になりたいから弟子入りさせてくださいって来る若者なら鍛えがいもあるだろうけど……。今どき、大学へ来る若者にそんな根性のあるヤツはいないよ。行き場がなくて、進学してきたヤツが多い。ゴミ箱の中から、ちよつとは値打ちのあるものを探し出すようなもんだ。

棟梁 ほーう。大学は最高学府っていうじゃないか。大卒はみんな立派な教育を受けてるんじゃないのか？ 俺の1人息子は高校を出て、俺の後を継ぎたいって、大工になったから。大工のどこに惚れたんだか。

教員 息子も立派だな。お前の後ろ姿をしっかり見て育ったんだらうよ。大学かあ。いくらい教育を授けても、受ける側にその姿勢がなきゃなあ。学歴なんてあっても、中身がなきゃあ。弟子だってやる気のないヤツは仕事をいくら教えても覚ええないだろ？

棟梁 そりゃあ、そうだ。

教員 酒の肴に、幾つか現状をご披露してやろう。

棟梁 おお。おもしろそうだな。

教員 まず、自分本位な若者が目につく。自分の都合だけ考えて、他人へは配慮しない。

棟梁 個人主義ってやつかあ。学力はどう？

教員 ひどいもんさ。活字を読まないから、800字程度の文章の趣旨が読み取れない。レポートを書かせても誰かの文章を写してくるだけ。とくに、演算ができない。小学校の3・4年生で習う割り算すらできない。だから、そこから復習するんだ。

棟梁 ええーっ。おい、大学生だろうが？ かつて、分数のできない大学生っていう新書がベストセラーになったよな。

教員 現状はもっと悪くなっている。学力だけじゃなく倫理観も。

棟梁 ええっ。たとえば？

教員 うん。大学3・4年生が1年生前期の講義に出席して、居眠りをしている。1年前期だから、高校を卒業したばかりの学生が聴く超々基礎的な講義だ。講義内容が易しすぎるのは当然だろ。しかし、テストをすると1年生の出来がいい。

棟梁 そりゃあ、ないだろ。

教員 テストをすると、俺は答案用紙を回収後、必ず模範解答をするんだ。それが終わり、黒板を消していると、ドアの横に置かれたゴミ箱へ模範解答紙を捨てて出て行く男子学生がいた。採点すると、彼は半分しか出来ていなかった。

棟梁 そりゃあ、ないだろ。

教員 大学では特定の科目に受講料を払って、講義に出席できる制度（特定科目等履修生）があるんだ。リタイヤした高齢者たちが向上心に燃えて、利用することがある。この制度を使って、俺のある科目を83歳のお婆ちゃんが受講してくれていた。83歳といえば、俺のお袋が亡くなった歳だ。若い学生たちに混じってお婆ちゃんはいつも最前列に座っていた。中学生が習う1次関数のグラフの描き方、2本の直線の交点の求め方を教え翌週、小テストをした。お婆ちゃんはその正しいグラフが描け、正しい交点の数値を解いていた。一方、若い学生たちの中には描けない、解けない者も多数いた。

棟梁 そりゃあ、ないだろ。

教員 こんなこともあった。『ある高校の生徒会がボランティアで傘を貸す運動をしていた。利用後は「お戻ください」と明記し、駅に200本の傘を置いた。1カ月後、9割の傘が戻されなかった。これに生徒たちは落胆させられた』という新聞記事『朝日新聞』、天声人語、2016年6月26日」を学生たちに示し、モラルや倫理感について考えさせた。どう、思いますか？ と問いかけると、 答えは「9割」。じゃあ、返さなくてもいいんだあ。」

棟梁 そりゃあ、ないだろ。

教員 教室で、よく眠っている学生がいるんだ。そばへ行って、起きて講義を聴くよう注意した。そのとき、学生はなんて答えたと思う。

棟梁 金を払って講義を聴いてるのに、眠てんのかよう。親切に注意してくれたのだから、すみません、だろ。高い月謝を払ってくれる親に申し訳ないだろ？

教員 いや、違う。そんな感謝なんて微塵もしていない。その学生は公務員予備校に通っていて、「この時間帯は眠いんです」だってさ。

棟梁 そりゃあ、ないだろ。

教員 さらに講義を聴かないと、単位がとれないぞ、と促すと、なんて答えたと思う。

棟梁 先生が声をかけてくれたんだから、頑張ります、だろ。

教員 いいや。「予備校で補習を受けているので、大丈夫です」だとき。

棟梁 そりゃあ、ないだろ。

教員 この先、オチもある。他の講義でも眠っているのか？ って聞いてみたんだ。何て答えたと思う。

棟梁 すみません。この講義だけです。すみません、って謝るだろ。

教員 何のなんの。「他の講義では眠てても単位をもらえる」って答えだあ。

棟梁 そりゃあ、ないだろ。

教員 次の話もひどいぞ。公務員予備校へ通う4年生がゼミナールを連絡も無く連続6回、欠席した。もちろん、事情があつて欠席するときは連絡をしてくるよう伝えてある。その学生たち2名が1カ月半ぶりに、研究室へ来た。公務員試験の1次にパスし、昨日、2次の面接試験を

たりにしたよ。

「また、ですか。今の大学生は学力が下がってるそうだから」

ある男子学生を黒板の前に呼んで、やらせたんだ。アクティブ・ラーニングといって、双方向に講義を進める教授法だよ。教員が一方的に教えても、学生の身に付かないので、こうした教授法を実践しろ、と文科省が推奨しているんだ。

「昔、大学受験のときに高校の数学の授業で入試問題を1人ずつ黒板で解かされたことを覚えているわ。で、どんな設問だったの？」

うん、一次関数の定義式 $y = ax + b$ の (x, y) の座標が、 $(50, 40)$ と $(30, 10)$ であるときに計算させて関数の式を求めさせたんだ。ところが、その学生は定義式に座標を当てはめることができないので、私が口頭で式を教えた。

$$40 = 50a + b \quad \dots \textcircled{1}$$

$$10 = 30a + b \quad \dots \textcircled{2}$$

この連立方程式を a と b について解けばいいんだ。お前のような、お婆ちゃんでも計算できるだろ。

①式マイナス②式で、 $30 = 20a$ だから、 $a = 3/2$ になるよな。ここにくるまでに、学生は私をびっくりさせるような計算をしたけど、それはいいやあ。そこで、割り算をしてもらって、つて尋ねたら、なんて答えたと思う。

「 $1 \cdot 5$ でしょ」

そうだよな。しかし、その学生は $0 \cdot 6$ について答えたんだ。これにはびっくりさせられた。大学の教員を30年もしてて、はじめて見たよ。他の学生たちの中には含み笑いをしている者もいた。それは正しい答えなの？ って訊くと、今度は $1 \cdot 5$ と書いた。どっちが正しいんだ？ ちよつ

と計算式を書いてもらって尋ねると、 $3/2$ って書くんだよなあ。参ったよ。この瞬間、私は、

これは小説になる、と思った。

「そんなあ。学生さんの学力が下がっていることは周知の事実だし、今さら小説にしても面白くもないわよ。数十年前に分数計算のできない大学生っていう新書がベストセラーになったことがあるでしょ。むしろ教育の現場で対策を考え実行した方がいいんじゃないの？」

そうだよな。大学にはこんな演算すらできない学生たちのために算数を教える部署をすでに設けているよ。でも、算数のできない学生は恥ずかしくて、むしろそんな部署へは行かないだろ？ 大学生なのに小学生の割り算を教えてくださいなんて言えんだろ。高校の数学の先生を講師に雇って、高校で習う数学をもう一度、教え直している大学もある。

「誰でも、お金さえあれば、どこかの大学の学生さんになれる時代だから。でも、そんな学力の学生たちは就職試験が大変なんじゃないの？」

そうでもない。今は、少子化で超売り手市場だから、学生数の少ない学科だと就職率は100%になる年度もあるよ。

「でも、どだい卒業できるの？」

こんな学生でも124単位を取得して、卒業できるんだな。かつ、どこかの会社へ雇われる。

「学力の低下は演算だけじゃ、ないでしょ」

そうそう。国語もだめだな。活字を読まないでスマホばかりいじっているから。

「読めれば、何とかなるでしょ」

いいや、800字ほどの文章の趣旨を読み取れない。レポートを書かせると、誰かの文章を写

してくる。そのうえ、身近にある漢字すら書けない。
「ええっ。どんな」

ある女子学生は4年生になって、就職活動をしていても「稚内」わっかないが書けない。その子は北海道生まれの北海道育ちだ。

「どんなふうに書いたのですか。その学生は」
うん、輪内だよ。

「ええっ！」

驚くな。まだ、あるぞ。「網走」あはしりは網尻^{あはしり}って書くんだ。

「お尻じゃないですかあ。でも、網は書けたんだ」

そう。出身が道東だからな。この「輪」や「尻」を見たとき、私は思わず、ピン芸人になればいいって冗談が口から出たよ。日常の生活のなかで出てくる漢字なのに、なぜ書けないのって尋ねると、小学生のころからスマホに頼りっぱなしなので、こんな漢字は中学生になれば書ける、高校生になれば書ける、大学生になれば書けるって、そのまま大学4年生になった、って本人が言ってた。ちなみにその学生は印刷会社への就職を希望していて、さっきの漢字も入社試験の一次試験に出たものらしいよ。当然、落とされたけど。

「ふーん」

私は、そんな学生たちを相手に教えているんだ。ときどき大学教育になっているのか、って自問したり落ち込むことがある。

「それじゃ、専門なんて無理でしょ」

うん。無理だよ。だから、どの科目も多くの内容を重複させて、基礎を身に付けさせているのさ。

「なにか、工夫をしているの？」

宿題を出す教員もいる。それを学生たちも望んでいるみたいだ。宿題を解いて、提出しておけば、単位をもらえろと思ひ込んでいるみたいだな。

「まるで小学生ねえ」

教員もそんな工夫をして、単位を出しているんだ。私は講義内で実施する小テストの結果を重視しているけど……。学力のある学生からすると、大学でなんて低レベルなことをしているんだ、ってきつと思っているだろうな。また、そう思っている学生が居て欲しいよ。

「努力しなくても、お金も学歴も手に入る時代だから……、幸せなようで、本当は可哀想ですよ。自分で悩んで困難に打ち勝っていく姿勢を身に付けないまま社会へ出るのだから。失敗しても、放っておいてあげた方が本人もこれじゃいけないって気づくことが大切だと思うけど。それを気づかせるのも教育でしょ」

そうだよなあ。なんでも易しく分かりやすく教えろ、って叫ぶ人がいるけど、易しい分かりやすいことに越したことはない。しかし、易しいと分かりやすいということは親切なようにみえて、実は非常に不親切なことかもしれない。その人が気づく機会を奪っているから。

「そうよねえ」

教育は双方向で努力しないと、成果は上がらないよ。教員が一生懸命、教えても学生が復習をして理解する努力をしないかぎり、身には付かないって。教えられることと、勉強とは違うってしょっちゅう、言ってあげてるんだけどな。

「どう、違うのですか？」

勉強つていうのは教えられたことを理解するよう自分で学ぶ機会や時間を作るってことさ。理解できないところは質問したり、他人に教えてもらったり、図書館で本を借りて自分で読んで、解決するとかさ。たとえば、英語の発音で教員が *th* や *f* はこう発音すると唇や舌を動かして見せても、教えられる側が真似をしないと、いつまでたっても正しい発音ができないだろ。

「そうね」

1+1=2+²の成果を上げようとすれば、相手も努力してくれなきゃ。そのために大学へ進学してきたのだから。

「うん。教える側は一人前で1、学生はまだ半人前だから0.5なのよ。きつと」

足して、1.5ってかあ。(2017年7月2日、日曜日、曇)

47. 観察

蟻ンコ。実直に働く蟻ンコの動きを観察したことのある方は多いでしょう。子供の頃、「水攻めだ！」と叫んで、その巣穴にホースの先を突っ込み、思いっきり水道の栓を開けた経験のある方もいるでしょう。何か、踏み潰した昆虫を、わざと徘徊する蟻ンコの前に置き、どうやって、どのくらいの時間をかけて巣穴まで運ぶのかを検証しようと試みた方もいるでしょう。よく観ていると、蟻ンコは必ずしも一直線に食料を巣穴まで運ぶわけではないようです。確かに、最短距離で運び込む輩もいますが、何かを警戒してか、食料を銜えたままあちへ、こちへとウロウロしている輩もいます。でも運ぶ姿をじっと観ていることにこちらが飽きてしまうこともあるので、その作業に法則性があるのか否か、は知りません。じれったくなって食料をとりあげ、巣穴へ押し込んだことのある方もいるでしょう。

うららかな空気の中で、庭の片隅にいる小さな虫の生への営みを観るのは何とも微笑ましいですよね。観察に飽きて、わきにある雑草を抜こうと手をだすと、コオロギがぴよんと飛び出て数秒静止しました。私には、ちよつと小首を傾げて振り向いたように観えました。「夕方から夜中にかけて、羽音を立てているのは私たちですよ。つゆ草、その他の(雑)草をむやみに抜かないでくださいね。私たちの埒ですから。」と言いたかったのかな？ それともこの季節、「庭の主役は私たちですよ。お忘れなく。」とでも伝えたかったのかな？

青々としている大根の葉っぱには忙しなく紋白蝶が卵を産みつけている。その動きは幼子がスキップを踏みぴよこんぴよこんと飛び撥ねる様子に似ている。あちこちにある竹竿の天辺には陽を受けるためにトンボが逗留^{とまりもつ}している。

再び、昆虫を運ぶ蟻ンコに視線をやると、その姿を探さなければならない状況になってしまっていた。昆虫を銜えた対象物はいない。そんなに長く現場から離れたかな？ と悔しいやら他のことに気をとられていた自分を反省するやらで、穏やかな秋の午後は過ぎていきました。(2013年9月8日、日曜日)

48. 蟻ンコへの想い

1. うろろうろしていると必ず、呼び捨てにされる蟻ンコ。あゝあ、蟻ンコがいる！
2. 必ず、踏んづけられる蟻ンコ。えい！ 潰してくれるわ。
3. 踏んづけられても潰れない蟻ンコ。

4. たとえ、潰されても潰されても土中から湧き出てくる、その様は強い生物の代名詞となっている蟻ンコ。

よろいかざと

5. 鎧 兜に剣を携えた中世の騎士のように描かれる蟻ンコ。

6. 働き者の代名詞にされている蟻ンコ。

7. 巣穴にホースの先を突っ込み水道の栓を目いっぱい全開され、ゲリラ豪雨の攻撃を受ける蟻ンコ。

8. 「蟻の巣コロリ」という毒饅頭を食らわされる蟻ンコ。

9. 人の脚に這い上がろうとすると、キヤー！ 嫌い！ と口撃される蟻ンコ。

10. 廃棄物処理業者、早い話が地上の掃除屋さんなのに嫌われる蟻ンコ。

11. でも、やっぱり子供にだけは愛されている蟻ンコ。(2013年9月18日、水曜日)

49. ヒヨドリの朝食

元旦の朝からヒヨドリが騒がしい。

庭にあるボケの花の実を啄^{つば}みに来ているようだ。

「キイゝ キーイ キーイ」

うるさい。どうやら枝に実が2個付いているようだ。1個は腐ってしまったているのか、あまりツツかれていない。もう1個は丸いリングの両端を残したようにツツかれている。

一気に食べてしまわないのは、美味ではないからであろうか。明日も明後日もツツクためであろうか。少しツツいては「キイゝ、キーイ」と啼いて飛んでいく。この音、「何か、ご馳走をくださいよ」とも聴こえてしまう。(2014年1月3日、金曜日)

50. 10月の蝶々

久しぶりに、気温が15度まで上昇した陽だまりの中を白い小さな2匹の蝶々が纏^{もつ}れるように飛び交っている。花びらを7分ほど広げたシュウメイギクに停まったり、青々とした大根の葉っぱに触れたり、気忙しそうだ。小春日和の休日であった。(2014年10月12日、月曜日)

51. 青首

秋冷の頃、大根は成長しません。完熟を目指します。

(これは先月の初めに蒔いた大根の種がようやく成長し、これから足首の太さになるまで、まだ1カ月はかかるうか、という時節の感想です。この地では、8月初めに蒔くべきだ、という反省を込めて。2015年10月4日、日曜日)

52. 毛地獄

短パン、裸足にサンダルを履いて、畑の大根に水をやった。足元には蟻の巣があり、働きものが忙しく動いていた。巣を荒らされるとでも感じたのか、数匹が私の足に登ってくる、そしてあろ

うことか噛み付いてくる。

膝を上げ、思いっきり力を込めて足裏を地面へ「ドンドン」と下ろした。これを数回、繰り返したが、一匹が落ちない。よく見ると、脛毛に体が絡まって右往左往していた。「とんまだなく」(2016年8月9日、火曜日)

(了)

